

月の灯

— つきのともしび —

プロローグ

「よー。京介」

聞き覚えのある、やる気のない挨拶に俺は振り返り、

「オッス、将」

と、その声の主に挨拶を返した。

室井 将（むろいしよう）は俺の古くからの悪友で、幼稚園からの仲である。

制服からだらしないはみ出たカッターシャツ、胸元から覗く真っ赤なシャツ—これってカッコいいのかね？—という乱れた服装に加え、茶髪の無造作ヘア。耳には銀色の安っぽい輪っかの形をしたピアス。一般世間の目に映る将の姿はもちろん不良の二文字で、それは古き友人である俺の目から見ても同じ事だ。

おまけにコイツは人に対する思いやりというものが全くない。俺以外とつるむのは、似たような連中ばかりだし、ご苦労な事に目上の人にもすっかり逆らっている。

まあバツと見の不良、というイメージ通りで間違いないのだろう。本人も良い子のつもり

は無さそうだな。

俺自身、こいつといてそれほど楽しいわけでも無い。もちろん嫌いなわけでも無いが、それでもこうして肩を並べて入学式に向かっているのはやはり古きの好だと思う。

でも、根は悪い奴じゃあないはずだ。俺は、そう信じている。

「ダルイよなー。入学式なんふぁー……」

将があくびをしながらつぶやいた。

そう、こいつが言うとおり今日は御神高校の入学式。

俺、深山 京介（みやまきようすけ）は今日から晴れて御神高校生徒。

新しい学園生活、期待と不安……通学路に舞う桜の花弁を眺め、改めて思い返した。高校生か……早かったような、まだまだこれからのような……

「今日から俺達高校生なんだよなー。可愛い子いるかな？」

「京介、お前には華ちゃんがいるだろー？」

「華……いや、いらんからあげる……」

そう口にした瞬間、背後から妙な殺気を感じた。

振り返るとそこには、俺たちと同じく御神高校に通うことになった友人が二人いた。

一人はさっきの会話に出ていた「華」こと夏目 華（なつめはな）である。

ショートカットの似合うまあまあ可愛い感じの少女だと思う。将と同様に彼女も俺とは古い

ので、本当に可愛いかどうかの判断はつきかねる。もう随分目が慣れてしまっているので、本当は俺が思っているよりもブサイクなのかもしれないし、もっと可愛いのかもれない。そこは第三者の判断に委ねる。

まあ外見はどうあれ：華はもちまへの明るくさっぱりした性格で、中学時代は結構人気者の位置にいた。：その人気が性格のお陰だと言うのはあくまで俺個人の意見だし、あるいはやはり華が可愛いから好かれていただけのかもしれない。

「：いらんのかアタシは」

冗談交じりの不機嫌そうな表情で、華は俺に詰め寄ってきた。将はケラケラ笑っている。

「いらんというか、くれるの？」

「：よくも人を物みたいに言ってくれるわね」

何となく立場のよろしくない会話を流すため、そのやりとりをやや後方から眺めていたもう一人の友人に目をくれた。

その友人は頭を少し俯き加減にして、見上げるような表情であいさつした。

「あの、おはよう京君に将君：」

もう一人は、桜川 直也（さくらがわなおや）。

童顔：というよりむしろ女顔だが、誰にでも優しくとてもおとなしい性格なのでよく女子にもてる。たまに、下手な女よりも可愛い時があるのが恐ろしい。

だがかなり気が弱いために、中学時代は将なんかによくいじめられていた。たまに泣いてい

た事もあつたんじゃないかと思う。

「おー。直也」

俺はなよなよした奴（直也）に挨拶した。そして将は直也に肩を組んで「よーイモ坊や」と、一礼（?）。本当は嫌なんだろうけど、直也は愛想笑い。入学早々大変だな、こいつも。

この四人が同じ御神中学出身で、御神高校に行く事になったメンバーだ。ざっと思い返してみたが、決して仲良しこよしでは無い。結構いびつな友人関係なんじゃないかと思うが、中学時代からはいつもこの面子だ。でも友人関係に恵まれていないと思つた事は無いし、そもそもいびつじゃない友人関係なんてものは存在しないのかもしれない。

そう考えるたび人間は複雑な生き物だな、と改めて思う。

将はまだ直也の肩に手をまわしている。当の直也もさすがに困り顔だ。

「やめなさいよ将君、直也君が嫌がつてるでしょ?」

そして、こうして華がいつも将を止める。

「おいおい、誤解すんなよ。仲良きことは美しきことかなっていうだろ?」

と、言いつつ—恐らく将は自分が言つた言葉の意味を理解していないのでは、と思う—直也を解放する。

ちなみに将の奴は華に気がある。そして何度か告白しているが、毎回「好きな人がいる」と断られている。

こんなこと言うのも嫌だけど、正直に言つて華の好きな人っていうのは俺だろう。自分で言

うのは自惚れみたいで恥ずかしいのだけれど、気付くものしょうがない。なんで分かるのかって言われてもわからないのだけれど、なんとなく分かってしまっただな、これが。

俺はといえば、華は、友達だ。もしくは姉、妹、双子かもしれない。昔から良く知っている仲だし、彼氏と彼女の関係なんてとてじやないけどできない。性関係なんてものを持つうとは思いたくない、というのもある。

そんな事より、人の顔を見てこう言う事しか頭に浮かばない自分自身に嫌悪感を抱く。これって人間が誰しも持つ一種の、原罪、なのではないか？そう思うと少しはラクだが、そこでまた浮かび上がる自己嫌悪。こんな悪循環は何よりもキライだ。

人という時は、何よりもやはり口を動かすべきなのだ。

「華、お前やっぱバレエ部入るの？」

「ん？そりやね、もちろんです。京介は軽音部？」

「え、あるの？軽音部なんか？」

「うん、あるよ」

俺の質問に答えたのは華ではなく、俺と華の会話を眺めていたなよとした奴（直也）だった。

「僕が入るつもりだけど…京君も入るよね？」

どうして軽音部かというと、俺と直也は一応バンドを組んでいる。直也はベースで俺はギター&ボーカル。ドラムの奴は違う高校に行ったから、この際その軽音部で見つけるのもいい。

というのも、ドラムの奴と俺たち二人はあまり上手くいつてなかったからだ。ドラムはパンク好き。俺たちはオルタナ好き。ジャンルの決して遠いわけでは無いのだが、やはり同じものとと言われると首を縦に振るわけにはいかない。

「いいなソレ、直也。入ろーぜ入ろーぜ」

俺が肯定の意を言葉で示すと、直也の表情が急に明るくなった。同時に、将は少しつまらなさそうな顔をした。

「やめとけやめとけ京介。つまんねーって」

「将はどうせ帰宅部だろ？」

「おうよ。なんならニコチン部でもつくろっか？」

将がタバコを吸う真似をしてヘラヘラ笑った。

「タバコなんてやめなさいよ。体に良くないよ？」

華がまるでお袋の様にしかりつけ、将は「へへっ」と一笑した。

そうこうしているうちに、これから通いつめる事になるであろう校舎が見え始めた。校門には「私立御神高校」と書かれた看板が、そして校舎には「第32回入学式」と書かれた看板が飾ってある。言っては悪いが、入学式の看板はすこしお粗末な出来だ。

御神高校はここ御神町にある唯一の高校（しかも私立）だ。学年ごとに2クラス。決して大きくは無い。校舎自体も結構古く、木造で、あまり立派なものには感じない。でも町内に住ん

でいるだけあってなじみがある分、嫌いじゃない。むしろあこがれていたかもしれない。

まず、御神町自体が「町」と呼ぶには少し小さい。一応、駅の周りにはそれなりの商店街などはあるが、隣町なんかに比べるといささか劣っていた。それでも駅がある分は他の町よりマシなのかもしれないが、御神駅のようにいまだき踏み切りがあったり無人だったりする駅なんてそうそうないだろう。いかにも、田舎の駅だ。もちろん嫌いじゃない。

なんて考えている内に、御神高校の校門はもう目の前まで迫っていた。

「なんかちよっと緊張してきたなー」

「そうだね」

なよっと相槌を打つ直也はちよっと可愛い分、気持ち悪かった。

「おんなじクラスになれるかなー？」

華がそういうと将はいやらしい顔をして「俺と？」と聞いたが「アンタ以外の二人とよ」と冷たくあしらわれていた。

そして俺たちは校門をくぐった。

4人の中で最初に足を踏み入れたのは将だった。

校門をくぐって直ぐのところの小さな広場があり、目の前に校舎、左側にはグラウンド、右

側へ行くと体育館に繋がっているらしい。そんな張り紙が張ってある。右側、体育館へと向かう道にぞろぞろと新入生の列ができていたので、俺たちもその列に加わった。行列は嫌いだが、クラス数が少ないだけあって新入生の数も少なく、ものの4、5分で体育館に到着した。

そして俺たちは並べてあるパイプ椅子に腰掛けた。

「校長先生の話。うざいんだよこれまた…」

いきなり愚痴る将。その気持ちは分からなくもないが…

そして10分程たった後「静かにしなさい」と、スピーカーを通した教師の声。ざわついていた声が次第に静かになっていった。

「これより第32回入学式を…」

入学式が始まった。将の方を見るといきなり睡眠モードに突入していた。華は真面目に先生の話の聞いている。直也の方を見ると目があつた。するとニコツとされてなんかまた気味が悪かつた…

教師がいつのまにか校長に代わり、変に明るい調子で「おそらく新入生の好感を買おうとしているのだろうか…」話をしていた。

「本校のモットーは明るく清く正しくであり、それに基づいた…」

…聞いているとイライラして来たので、俺もちよつと寝ることにした。

「…京介！おきなさいよ！」

気が付けば華が俺を起こしていた。

「：おはよう」

「おはようじゃないよ。グラウンドにクラス発表の掲示板が立ってるから、それを見に行かないか。その後自分のクラスに移動だって」

「将と直也は？」

「もう行ったよ！」

俺たちは急いでグラウンドに向かった。

そして掲示板の前。

「残念だったなー！桜川！」

将が直也を笑っている。

俺たちは掲示板を覗き込んだ。

「お、三人同じクラスだ」

俺と将と華は三人とも1年2組だった。

：しかし直也だけ1組だった。

「元氣だしなさいよ直也君」

華が直也を慰める。直也はため息ばかりついていた。

将が肘でこついてきた。

「なあなあ京介。俺たちのクラスどの子が可愛いと思う？」

「んー？名前だけで分かるかよ」

「へへ、実は俺は名前だけで分かるんだな。一種の超能力だ」

そう言って将は掲示板を指差した。俺は将の指差した名前をよんでみた。

「月海 彩目（つきみあやめ）…」

確かに不思議な名前だ。これでブサイクだったら非常に腹立たしい。

…そして俺たちは1年2組に向かった。

なよなよした奴は途中で1組の教室に入っていた。

1年2組。俺たちは出席番号順に座っていった。出席番号は五十音順。「深山」と「室井」は幸い名前が近いので前後に座ることになった。華は女子の方なので全然遠かった。そして担任らしき若い教師が入ってきた。おそらく新米だろう。

「起立、礼、着席」

淡々と礼を済ました。

「僕が1年2組の担任を勤める事になった大石です。よろしく」

そして大石先生は出席を取り始めた。

明石、伊藤、奥野…そして俺の番にまわってきた。

「深山」

「はい」

「室井」

「うーっす」

なんてやる気の無い返事…。

男子が全員終わった。次は女子だ。出席番号順に名前と返事が繰り返される…。
そして。

「月海」

「はい」

その名前が出た途端、俺と将は声の主を同時に見合わせた。
ブサイクだったら許さんと思ったが、それはいらぬ心配だった。

月海 彩目…。可愛い、というよりはすごい美人だった。

真っ黒のロングヘアにすっきりした顔立ちだが、目つきは結構鋭かった。
なんか近寄りがたいオーラをはなってる。

「すっげーな、おい」

将も美人と認めたようだ。

「あれぞ大和撫子だな」

「確かに」

彼女、月海さんは頬杖をつき、どこか物憂げな顔で遠くを眺めている。その様も見事に絵となっている。

「楽しい学園生活になりそうだよな京介」

楽しい学園生活……か。そりゃ彼女が俺に振り向いてからだろ。

「将、お前には華がいるだろが」

「俺？あきらめよっかなー？」

暖かい陽気、窓の向こうには華麗な桜吹雪。

桜花爛漫、のどかな春の景色だ。

今日、俺は高校生になった。

第1章く雨雲く

御神高校に入学してから早くも一月あまりが経過した。

桜はとうに散り、窓から差し込むうらかな日差しは生徒達の眠気を絶えず誘っている……。窓の隙間はカーテンをなびかせ、そこから吹き込むそよ風はとても心地良い。

そんな景色を一人頬杖をついて眺めている可憐な少女。

月海 彩目さん。

彼女はとにかく誰とも喋らなかつた。話しているのを見たことがない。

まるで他人を拒絶するような徹底した無表情に、誰も近づく事はできなかつた。しかし、その美しさは隣のクラスまで広まっている。まさに男子の憧れの的だ。

…でも、そのせいもあり女子からは嫌われているようだ。

もちろん俺も憧れてはいるが、一言も口をきいた事は無い。

俺の彼女に対する興味は日に日に募るばかりだった。

「京介、食堂行こうぜー！」

将のでかい声が寝起きの頭に響く。

「えー？もう昼か」

よだれを拭いて、俺は食堂へ向かうことにした。

廊下に出て食堂へ歩き出す。いつものメンバーだ。

俺、将、そしてこっちで新しくできた友達二人。明石と佐藤だ。

俺以外はみんないわゆる不良だった。

こいつらとは校内ではつるむが、外では俺は大抵直也と遊んでいた。食堂に着くと俺は天ぷら蕎麦の食券を購入。蕎麦コーナーに並ぶ。

「おーッス、京介」

華も並んできた。華もどうやら蕎麦を食べるみたいだ。

「よお華。バレーは頑張ってるか？」

「まあね。早くもレギュラー入りだよ！」

「え、マジ？それはすごいんじゃないの？」

「へへへ、自慢自慢。でも……」

華は何かを言いかけて俯いてしまった。表情はどこか少し暗い。

「どーしたんだよ？」

「いや、なんでもない。頑張るわ」

「なんだそりゃ」

なんかしつくりこない。変な違和感を感じたまま話を打ち切られた。

俺は蕎麦を買って将達の座っている席へ向かった。

「京介。おめー、月海さんにアプローチ仕掛けたか？」
将がコーヒーを飲みながら話を振ってきた。

「ん？…いや、まだ」

「だらしねーなあ。明石の奴が先に行動を起こしたぜ」
それをきいて俺はちよつと嫌な気になった。

「げ、マジ？どうだったの明石？」

「それがさ…」

明石の話を聞いてホッとした。

ついさつき、食堂でのことだった。

明石はまず月海さんの座ってる席に向かい

「隣いっすか？」

と聞いたらしい。

しかし彼女はまるつきり無視。

困り果てた明石は仕方なしに隣の席に腰をおろした瞬間…まるで明石を避けるように彼女は席を立ち、食堂を出て行った。

「敵は難攻不落ですなー」

将が変な口調で言った。

当の明石はペチャンコにへこんでいる。

「おっしや、次は俺の番か！」

急にデブの佐藤が意気込む。

「デブは無理だからやめとけよ」

俺が優しくなだめてあげた。

「デブとは失礼な！五時間目の休み時間にすごい事をしてやろう」

「気をつけないとろくな事考えねえからな、このデブは」

将が言ったとおり。こいつは何をしでかすか分からない。

「ブヒ、ブヒヒヒ…」

…俺たち三人といえば佐藤と距離を置くかどうか悩むところであった。

…五時間目終了。休み時間だ。俺たち三人は集まった。

そして佐藤は月海さんの方へ向かった。

月海さんは日番なので黒板を消している。

忍び寄る佐藤。

「佐藤のやつ、何をする気だ…？」

「やっぱり止めたほうがいいんじゃない？」

そう言った直後：

「おっとつまづいたー！」

超わざとらしい悲鳴とともにつまづいた佐藤は、月海さんめがけて突っ込んでいった！

「しまった！遅かった！」

「奴の狙いはケツだ！」

そうだった、佐藤は尻フェチだった！

以前「俺は尻星から来た」とかいつてたっけ……。奴は尻星人だった。

その佐藤はこけつつも月海さんの尻に顔をぶつけ、激しい地鳴りとともに地面に伏した。教室は静まり返っている。

佐藤はうつ伏せだったので顔は見えなかったが、きっと恍惚としていただろう：

「やられた！」

そう言いながらも、俺は月海さんのリアクションに期待していることに気付いた。

月海さんは冷ややかな顔で佐藤を見下ろしている。

そして：

ガスッ！

月海さんは佐藤の脳天を蹴り飛ばした！

…すごい音がした。

「うわ！」

「ひ…」

あまりのむごさに思わずクラス中が思わず悲鳴をあげた。奴の罪に対する罰にはお釣りが出るくらいに強烈な一撃だった。

そして月海さんは黙って自分の席につき、不愉快そうな顔で頼杖を付いて何処か窓の外を眺めている。

佐藤は動かない。

俺たちは佐藤の下に駆け寄った。

「大丈夫かぁ佐藤オ！」

俺たちは佐藤を仰向けにした。今思えばうつ伏せのままのほうが良かったかもしれない。

…佐藤は泣いていた。

高校生にもなって女子のケツに突っ込んで蹴り飛ばされて泣いている…。

「う、グ、ブヒ…」

クラスは笑いをこらえていたが、俺たちは爆笑した。

「ギャハハハハ！駄目だこいつ！」

俺はチラッと月海さんを見たが、相変わらず無表情だ。

こいつを蹴り飛ばした時もすこしムツとしたような表情だったただけだ。

6時間目の国語の時間、大石先生が泣いている佐藤を見て「どうした佐藤、具合悪いのか？」と聞いた時も俺達は爆笑した。

「先生こいつ頭の具合が悪いんですよ！外も中も！」

将はとことん佐藤をバカにしていた。そんな佐藤もぐずついているばかりだった。

「ういーッス」

授業が終わって放課後。俺は軽音部の部室を訪れた。

「軽音部」といつても、俺と直也以外来たためしがなく、ミーティング以外で他の部員を見た事が無い。

しかし、今日の部室には直也と誰か知らない女の子がいた。

優くて内気そうな子だ。肩まで伸びた髪と眼鏡が似合っていてなかなか可愛い。

一見、音楽少女というよりは文学少女だ。

「あれ…？あの、新入部員さんですか？」

俺が問うと、少女はもじもじしながら言った。

「はい、あの…藤森 沙紀（ふしもりさき）です。よろしくおねがいします…」

最後のほうは消え入りそうな声だった。人付き合いが苦手そうな子だ。

と言うものの、何を隠そう俺も女性が少し苦手だった。…華は別として。

「あ、深山です。よろしく…」

女性の前だと妙にあがってしまう。

俺は彼女に妙な違和感を感じていた。

とにかく、ここは直也に任そう。俺は直也に視線をくれた。

「ああ、あの、この子はうちのクラスの藤森さんで」

名前はさっき聞いた。

「パートはドラムだつて。好きなジャンルはなんだっけ？」

「あ、あの…ジャズ系です。最近はフュージョン系なんか…」

「あー。いいよねフュージョン」

とりあえず相槌。俺も嫌いじゃない。

「うーん。じゃあとりあえず適当に叩いてみてよ」

「あ、はい」

そう言うのと藤森さんはいかにもジャジーなドラムを叩いた。

そして技術には確かなものがあった。

「いいね、藤森さん、上手い上手い」

「あ、どうも…」

にっこり微笑む彼女。

「ジャズ以外には？」

「私一番得意なのが父に教わったジャズ系なもので…。みなさんはどんな音楽好きなんですか？」

「あー、そうだなあ…」

「京君は最近は何？」

「メタル系か…オルタナ系かなー？」

「分かりました、勉強しておきます」

「あー、悪いね…何枚かCD貸すよ」

感じの良い子が部に入ってきて今日はハッピーだった。

帰宅途中…

「直也、あの子…沙紀ちゃんどう？」

「え、どうって言われても…まあ、可愛い感じかなあ…」

「気にいってんじゃないの？」

「って俺はオヤジか…」

「いや、僕は心に決めた人がいるから…」

「え？誰？」

「そ…それは言えない！」

夕焼けで赤く染まった直也の顔がさらに赤くなってるのがわかった。

ヒントにウブな奴。

「同じ中学？」

「…うん」

俺はこうやってヒントをもらいつつ好きな人なんかをあてるのが結構好きだ。

「吉田」

「違うよ」

「佐々木」

「違う違う」

「最後は同じクラス？」

「うん」

…結局その日は誰なのか分からなかった。

次の日：

ブタ（佐藤）はショックで休みのようだ。それでまた笑えた。
あいつは一回につき三度おいしいやつだな。

昼休み、食堂はいつものとおり生徒達であふれかえっている。

「：俺しかないな」

俺の前に座っている将が妙に意気込んでいた。

：また月海さんか。懲りない奴等だ。

「もうやめとけよー：」

「お前が行かない以上、俺しかない！」

「行け行け！お前ならやれる！」

明石は将をあおっている。

「おーっし！」

「どうやって近づくつもりなんだ？」

「おうよ！手紙を机の中に仕込む！」

なんとも古典的な作戦。しかし、なかなか楽しそうだ。

「だったら彼女より先に教室に戻らないと」

俺達は彼女、月海さんの方を見た。

席を立ち上がり今にも教室に向かおうとしているところだ。

「まずい、遅かったか！？」

「いや、大丈夫！手紙はさっきの国語の時間に書いた！」

用意周到だ：。とにかく俺達はダッシュで教室に向かった。

…教室

「これでよしと！」

将は月海さんの机にラブレターを仕込んだ。

「クー！楽しみだぜ！」

そのとき、教室のドアが勢い良く開いた。

三人はドキッとした。

だが、入ってきたのは華だった。

「お、脅かすなよ華！」

「脅かすなつて…何？人で月海さんの机にたかつてんの？」

「ん…？ああ、そういや不自然だよな。散るか」

三人は自分たちの席についた。

隣から華が話し掛けてきた。5月の最初に席替えをして、華は俺の隣に座ることになった。ちなみに俺の2つ前の席が月海さんだ。

「ねえ、どーしたの？」

「将の奴、月海さんの机にラブレター入れてやんの！」

「へえ、そりやまた結果が見えた…」

「こらこら、みなまで言うな！」

と、そこへ静かにドアを開く音が耳に入ってきた。

月海さんだ。

「来た！」

三人は顔を見合わせた。月海さんはまっすぐ自分の席についた。しかし、頬杖を付いて窓を眺めている。

「あーもう！もどかしい！」

将の貧乏ゆすりが目障りだ。

キーンコーンカーンコーン……

始業のベルが鳴った。次の時間は数学。机から教科書とノートを取り出さなければいけないので、嫌でも手紙に気付くはず……

数学の教師が入ってきた。

起立、礼、着席……月海さんは机の中に手をいれた。

そして……

月海さんが数学の教科書を取り出したと同時に一枚の手紙が床に落ちた。

「きたきたきた……！」

将は小声で呟いた。緊張してるだろうな……

月海さんは無表情のまま手紙を拾い上げ、しばらく眺めてから無言のまま開封した。そして、一枚の便箋を取り出し、それを読み始めた。

いまの俺たちには授業を進める教師の声は届いていない。

ただ、月海さんのリアクションが待ち遠しかった。
まだ月海さんは便箋を眺めている。

そして：クシャツという音とともに紙を丸める音が教室に響いた。

彼女の顔は少し怒っているようにも見える。

将は唾然としている。

さらに、彼女は丸めた紙を窓からほおり投げた！

「あ：あ：あ、あ！」

将は汗でびっしょりだ。

そんな扱いを受けてシヨックであろう。

しかし、何よりもあの便箋を誰かに見られたら：

きつと将はそれで焦っているのだろう。真っ青になっている将は勢い良く立ち上がった。

「す、すすすいませんべべ便所」

真っ青で汗びっしょりな将を見て先生も

「あ、ああ。大丈夫か？早く行きたまえ」

と、すぐ許可をおろした。

将は教室を飛び出した。

今ごろ便箋を必死に探している頃だろう。

月海さんは相変わらず無表情。：むごい人だ。

そして30分ほどたって将は帰ってきた。

「室井、やけに長いトイレだったな」

「いえ…」

何故かやけに浮かない顔をしている将が気になった。

：そして五時間目は終わった。

「便箋あった？」

俺がそう聞いても将はうつむいている。

「な、なかったのか…」

「どうしよう、どうしよう…」

今日の将はなんかとてもかわいそうだった。

「お前、なんて便箋に書いたの？月海さん怒ってるみたいだけど…」

「いや、今日一緒にカラオケ行ってよかったらホテルいこーって。そんだけ可愛かったら初めでじゃないでしょ？って書いたけど、やっぱりまずかったかな…？」

「お前馬鹿か」

：月海さんが怒って当然だ。

：放課後

将は明石ととぼとぼ教室を出て行った。

ドアでいったん振り返って月海さんを睨んでいたが、月海さんは反対のドアから出て行くところだった。

「さーて部活だ部活だ」

俺が意気込んでいる横で華がすこし暗い。

「どうしたんだよ華」

「ん？べつに…」

昨日といい今日といい変な雰囲気の花。

いったいどうしたと言うのか…？部活で何か問題でもあるのではないだろうか？

「どうしたんだよ、ちゃんと見えよ」

一瞬、華は悲しそうな顔をして

「いや、ちょっと部活がキツイだけ。頑張るべきよこのくらい」

華はまるで自分に言い聞かせるように言い放った。

「そうか…頑張れよ」

「うん…」

変な不安を残しつつ、俺は部室に向かうことにした。

軽快なベースの音が、ここ2階にまで響いている。先に直也が部室にいるな。部室は本館4階にある。

俺たち1年2組も本館2階にあるので、階段を上げればすぐに辿り着く。

俺はベースの響きでガタガタ揺れてるドアをあけた。

やはり部室には直也と藤森さんしかいない。

「オッス」

「あ、京君」

「…京さん、こんにちは」

藤森さんにいきなり名前と呼ばれて、正直戸惑った。

「あ、やあ藤森さん」

「あの…沙紀、でいいですよ」

「あー、そう？じゃあ沙紀ちゃん。CDきいた？」

「あ、はい。昨日お借りしたCDですけど…」

「気に入ったのあった？」

「はい、これがよかったです。リズム隊とギターが上手く絡んでてかっこよかったなーなんて。でも特にベースがよかったです」

「でしょ？俺もそれ気に入ってる」

「京君、それ僕が貸したCDじゃ…」

「ん？…まあまあ」

そんな感じで今日も一日すごした。

今日も帰りから直也に誰が好きなのか聞こうとしたが、無理だった。

そして、夜。

布団に入って眠る直前だった。うとうととしていた頭の中に電子音が流れてきた。携帯のメール到着を知らせるメロディだ。

布団から無理やり体を起こし、俺は携帯に入ったメールの中身を見た。しかしその内容は決して良いものではなかった。

何故かメールの文字は言葉と違ってものすごく冷たく感じる。

そのせいもあってか、俺はこのメールに妙な恐怖を覚えた。

「月海ってむかつくよな？どう思う？」

…何か嫌な予感がする。

とにかく、まずメールを返信しなきゃ。

「お前らが悪いんだろ」

俺はメールで送信した。するとすぐメールが返ってきた。

「思い知らせてやろうぜ」

なんで？どうしてそうなるんだ？自分の愚かさに気付かないのかこいつ。

…いや、そもそも将があそこまでされて黙っているとは思えない。

忘れてた。こいつらは不良だ。

学校の中ではいっしょに授業をすごして、くだらない話をして、ダルイダルイで一日を終えるが、外でのこいつらの顔は違う。

万引き、喧嘩、カツアゲ…どれも日常のことなんだろう。

まずい…。

俺は一人焦りだした。

「やめとけよ」

メールを打って少しの間、布団の中で将からのメールを待った。

ブラインドから差し込む月明かりは、壁に縞模様を作り出している。

じっとそれを眺めながら俺は月海さんの心配をしていた。

…次の日の朝。

外はしとしとと雨が降っている。

昨日、あれから10分ぐらい待っただろうか、気が付けば俺は眠りに落ちていた。

俺はベッドから飛び起きて携帯を覗き込んだ。

…メールは来ていない。

まさか、やめとけよの一言で怒ったりしないだろうな将の奴。
俺は急いで支度をして学校に向かった。

教室。

黒板には5月19日と書いてある。

始業前の教室にはまだ数人かししか来ていない。

大体の奴は始業ベルギリギリにくるからだ。

月海さんの姿は無い。だが、例の三人は来ていた。

将と明石と佐藤は固まってなにやら話をしている。

「将」

俺は一言、悪友に声をかけた。

「よお、京介。ちよっと」

将が手招きをしている。

「月海の椅子に画鋏置くっていうのはどうだろ？」

一瞬将の言葉が信じられなかった。

何を考えてるんだこいつは！

「馬鹿、やめとけよ！」

俺は月海さんの席をチラッと見た。まだ来ていない。

「なんでだよ」

「なんでって、普通で考えりやそんなことしないのがあたりまえだろーが！それに昨日の今日だぜ、お前が月海さんに疑われるぞ」

明石と佐藤は訝しげな顔でこっちをみている。

「大丈夫だって。疑われたって。なんてことは無いさ」

将がいきなり遠い人種に感じられた。やっぱり、こいつらは…
俺はあきらかに将に違和感を感じていた。

「来た来た」

明石が教室に入ってきた月海さんをニヤニヤした顔で見ている。佐藤と将も同じ事をしている。月海さんは気付いているのか気付いていないのか、全く無視。

「もうやめとけよ。女に手を出す気かよ」

「手は出してねえよ」

「昨日まで好きだった女の子にどうしてそんなことができるんだよ」

「別に好きじゃ無かったって。あんな美人が自分の女にできたら自慢になるだろ？」

明石のこの一言がこいつらの本心かよ…

今日はいつらとつるむ気は起こらない。

俺は自分の席に向かった。

「おはよ」

隣の席にはもう華がいた。

「おー」

「どうしたの？なんか機嫌悪そうね」

「なんでもない」

そういつて俺は机に伏した。

「なんでもないねえ……。だったらもう少しなんでもない様にしてよね」

はは：確かに。俺は一笑して窓の外を眺めた。

空一面に雨雲が、窓ガラスには無数の雨があたっている。

もうすぐ梅雨か。ほんと、嫌な季節だ……。

始業ベルとともに担任の大石が入ってきた。ほとんど機械的に起立、礼、着席。

一時間目はホームルームだ。

「今日は6月13日にある「オリエンテーション合宿」のグループ決めを行ってもらいます。

大体一班6人で固まってください。男女それぞれ3班ずつになります」

オリエンテーション合宿：仕方ない。あいつらと組むか。

「将、一緒に組むだろ？」

「おー、来たか京介」

よかった。さっきの事があって、正直、のけ者にされるかも知れないと言う不安が少しあった。

「あと誰誘う？」

明石が聞いてきた。俺、将、明石、佐藤……そうか、あと二人。

「そうだな……余った奴でいいんじゃない？」

「誰が余るかなー」

将はそういうと月海さんの方を見て

「絶対あいつ女子の中で仲間はずれだぜ」

と、いやらしい笑みを浮かべている。不愉快だ。

だが、確かに彼女は女子の中でも好かれていなかった。一人余るのは目に見えている。

と、そのとき華達のグループが月海の方へ向かっていった。

「アタシ達の所に入んない？」

と誘っている。

よし、いいぞ華！華は割と誰とでも仲良くする奴だ。

それがあいつのいいところでもある。

月海さんは静かにうなずいた。将はチツと舌打ちして不愉快そうな顔をしている。いい気味だ。

そうこうしているうちにだんだんグループは固まりだしている。

俺達は誰が余りそうか教室を眺めはじめた。そのとき、背後から声がした。

「深山君、入れてくれない？」

声の主は割と男らしい顔立ちにさわやかな髪型をしていた。

こいつは確か：サッカー部でこのクラスの委員長である水戸 昌一（みとしょういち）だ。

「ああ、いいけど…」

めずらしいな。こいつならスポーツ軍団に入ると思ったのに。俺と将は不思議そうに顔を見合
わせたけどあえて何も言わなかった。後一人だ。

いつのまにやら俺たち以外はグループができていた。男子はスポーツ軍団、文化部軍団、そし
て俺たち帰宅部軍団（俺はちゃんと部活にはいつてるのに）に分かれた。

「誰が余ってるんだ？」

佐藤があたりを眺め出した。俺も探しはじめたが、概ね見当はついていていた。

そいつは園田 浩次（そのだこうじ）。アニオタ、パソオタで暗い典型的ないじめられっこだ。
将達にたまーにいじられる、将のでかい声が響いた。

「出たー！園田だー！」

やはり。

そして園田は近づいてきた。園田はちゃんと風呂に入っているのかいないのか、妙な異臭を漂
わせている。

「あの、あれ、君たち余ってるでしょ」

「お前だろが余ってるのは！」

将がツッコむ。

「あれ、あの、入れてよ、俺」

「分かったからさっさと戻れよクセーな！」

明石が園田に罵声を浴びせた。園田はそそくさと席についた。一体どんな合宿になるのか…。

「はい、それではグループが決まったようなので、今日は席替えをします」

このクラスでは、席替えはクラスがうるさかった週に行う「うるさい制」だった。

おかしい制度だ。おかげで3週間に1度は席替えをしている。

クラスは盛り上がっているが、俺は一番後ろの窓側という今の席が気に入っていたので別に席替えなんてしたくなかった。

委員長、水戸が袋を持って回ってきた。

俺は袋に手をいれ、無数の紙切れの中から一枚だけ取り出した。

番号は：7番。ラッキーセブンなんて言葉は別に好きじゃなかったの、特別な関心は起こらなかった。そして大石が黒板にクラスの席の図をかい、そこへ適当に番号を書き込んでいった。俺の席は：げっ、一番前かよ！

窓際から2列目の一番前だった。

「それじゃあ移動してください」

俺は新しい自分の席に移動した。

机には「The Blue Hearts」と彫ってある。

どうでもいいけどスペル違うぞ…。それじゃあ「青い雄ジカ達」だって。

というか、一番前はいくらなんでも酷すぎる。教師に起こされるので俺の睡眠時間が削減されてしまう…

ふと、窓側からとてもいい香りがした。

そちらに目をやると…彼女はいた。

美しく流れる長い髪、綺麗な顔に鋭い目。頬杖をつき、窓の外をどこか愁いを帯びた美しい瞳は雨雲の果てを眺めていた。

月海 彩目。彼女は俺の隣の席にきた。

俺は内心とてもドキドキしていた。…この席、悪くないかも。

ブルル…。携帯が震えた。将からのメールだ。

「よかったなお姫様の隣で」

後ろを振り返ると将は前の俺の席にいた。その隣に明石、そしてそのまた隣に佐藤がニヤニヤこつちを見ている。なんかムカつく。めんどくさいしメールは返さない。

ちなみに華の席はクラスの真ん中の方だ。

「はい。じゃ、今月はこの席でいきますんで」

そして一時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。俺は将の方へ向かった。

「薔薇色の学園生活じゃねえか」

将が茶化してきた。

「うるせーな」

俺は否定はしなかった。…確かに少し嬉しい。

「そーいやお前だけ彼女にアタックしてねえぞ」

う…佐藤が余計なことを…

「ホントだ。今日中になんかしろよ京介」

明石も便乗してきた。

「ま、マジかよ…」

「無理だと思うけどがんばんな！王子様」

将もおおっている。どうやら避けれそうにもない…。

ああ、どうしようどうしよう…。そうこうしているうちに2時間目が始まった。なにかいい作戦は無いか考えたが、結局何も出てこないまま時計は廻っていった…

昼休みの食堂。4時間目の体育の後なので猛烈に腹が減った。

俺が勢い良く天ぷら蕎麦をたいらげている横で将がコーヒーを飲んでる。

明石と佐藤はカレーだ。

「さ、どうするんだい深山さんよー」

ち、将のやつまだ言ってやがる。

「5時間目に考えるって」

「ホントかよ、そんな事いってうまいこと逃れようとしてんじゃないの？」

佐藤め、うるさいデブだ。

とりあえず、今日はなんとか勘弁してもらおう。

「ほら、お前らが失敗したのは焦り過ぎたからだろ？俺はちよつとずつ親睦を深めようと思っ
てんだよ」

「んなもん見ても面白くないじゃん」

明石が痛いところをついてきた。

「お前ってまさか…マジに惚れてんの？」

将が聞いてきた。

「マジに惚れているというか…、少なくとも嫌われたくは無い」

そう、これが本音だ。

「ま、お前にや華ちゃんがいるからな」

あいつはホントは対象外だけど、とりあえずそれで納得してくれないだろうか…

「え？何、京介と夏目ってそういう関係だったの？」

明石が興味津々そうにしている。

「あー、じゃそれでいいから月海さんの件は無しという事で…」

…今思えばそんなこというんじゃないかった。

次の日：俺はたまたま華といっしょに登校していた。

「よ、熱いねお二人さん！」

佐藤がお出迎え。クラスの視線がちらちらこっちに向いている。

「な、何がよ佐藤君。いっしょに登校しただけじゃない！」

華は顔を赤らめて焦っている。

「いいよなー、美男美女のカップルは見てるこっちまでうっとりするね」

明石が気持ちの悪い事を言ってくる。

しかし、将はあんまり乗り気じゃないらしい。

そりゃそうだ。あいつは華に惚れている。このまま勢いで俺と華がくっついたら嫌だからだろ
う。

「よせよ、こいつらはそんなんじゃねえって」

将がとりあえず止めてくれたおかげでなんとかその場は凌いだが、その日から俺と華は校内で
ロクに話もできなくなってしまうた。

そんな状況で2週間ほどたった後の事だった。

五時間目の休み時間。

「深山君、ちょっと話が」

声の主はあまり見慣れない顔だった。

確か同じクラスで、華と同じバレー部の子だったと思う。名前は知らない。

「ん、何？」

寝起きだった頭も予期せぬ人物からの呼びかけにすっかり冴えていた。

「夏目さんの事なんだけど……」

「華……？どーして俺に相談するんだよ」

ちよつとムツとした。本気で付き合っていると思っているのか？このクラスの連中は……

「いや、仲が良いらしいから……。とりあえず聞くだけ聞いて！実は……」

彼女が言うには、最近華の元気が無いらしい。それは俺の目にも止まっていた。

しかし、その理由というのが酷いものだった。

華は入部わずか一、二ヶ月でレギュラーに選ばれた天才だ。しかしあいつが選ばれるということは、1年もしくは2年間頑張り続けた誰かがベンチ入りになる訳だ。

……実は、華はそのベンチ入りしてしまった先輩とその仲間から酷く苛めを受けていた。

いつかの彼女の言葉が頭に響いた。

（いや、ちよつと部活がキツイだけ。頑張るべきよこのくらい）

俺はやつと、感じていた違和感の原因がわかった。

もつと早く気付いてあげればよかった…!

「苛めって…どんな？」

「最初は陰険なものだったんだけど、だんだん露骨になってきて…」

俺はいつに無く真剣に他人の話を聞いていた。

「この前なんかカバンのとつてに剃刀の刃が添えてあったんだから。彼女泣いてたよ…」
ふと、華のいる方に目をやった。

友達と楽しそうに喋っているが、その顔には何処か悲しそうな表情もあった。

そして手を見ると包帯がしてある。剃刀の刃で切ったのだろう。俺は胸を締め付けられる思いになった。

「あの手でバレーやってるの?…あいつ」

「うん…。すごいでしょ」

「…俺はどうすりゃいいんだ？」

「とりあえず、彼女の支えになってあげてよ…。彼女、深山君の事がその…好き…なんだから」

話が終わると彼女は華のもとへ歩いていった。

話を聞いた後、俺は彼女に深い同情を感じた。

俺はどうすればいいんだろう?

どうすれば彼女の支えになれるだろう…?

放課後、とりあえず悩んでいても仕方ないので部室に向かった。そこにはいつもどおり直也と沙紀ちゃんがいる。

「オッス」

「あ、京君」

「京さん：？なんか浮かない顔ですね」

沙紀ちゃんは優しくいつもの気弱そうな態度だが、意外にするどい子だったりする。

「あーいや…」

俺は理由を話そうか悩んだ。このことを話すということは華自身の名誉も傷つけることになるんじゃないか：？

：悩んだ挙句、俺はやっぱり話すことにした。

大丈夫、こいつらには話す価値がある。

俺は全てを話した。

「夏目さんが：そんなことに」

直也もやっぱり俺みたいに沈んでしまった。沙紀ちゃんは華のことを知らないのです、別に落ち込んだりはしていない：と、思ったがなぜか表情は暗い。

いや、なぜかってことは無いか。

「どう思う？」

直也はうーん、とうなつて何にも言わない。

すると、沙紀ちゃんは：意を決したように一人うなずいてから言った。

「今日私たち三人でその子と話をしません？」

俺と直也はすこし驚いた。

この子はそんなに人付き合いが得意な方じゃない。

ましてや初めて会う女の子の悩みなんて聞けるのだろうか？

「俺達は良いけど：沙紀ちゃんどうしてまた？」

しばしの沈黙：

そして彼女が口を開いた。

「私ね：中学生の時、双葉女子中学校にいた時、苛められてたの」

それで：か。それを思い出して彼女は暗かったんだ。

俺達は彼女からの思いもよらない告白に一瞬戸惑ったが、彼女の言葉に耳を傾けた。

「彼女に今必要なのは心を開いて話せる相談相手だと思うの。私はそんな友達が欲しかった

：

俺はいままで沙紀ちゃんを気弱な少女とばかり思っていた。

でも、違ってた。

とても勇気のある子だ。他人の為に自分のプライドを棄てられるんだから。

「…わかった。ありがとう沙紀ちゃん。今日部活が終わったらみんなで集まろう」
そう、彼女の告白を無駄にしちゃいけない。

部活を終えた俺達は校門で待つことにした。

「ひよっとしたらもう部活を終えているかもしれないよ」

「メール一応さつき打つといたけど、電話かけてみようか」

プルルル…プルルル…3回4回とコールするが、出る気配は無い。

「なんか嫌な予感がするね…」

「ちよつと俺見てくる」

俺は一人体育館の方へ向かった。

体育館は真っ暗で人がいる気配は無い。バレー部の部室に行くのは少し気が引けるが、そもそも言っていられないだろう。俺はバレー部の部室に向かった。

部室には灯りがついていて。まだ誰かいるみたいだ。

俺はためらいながらもドアをノックした。

…しばらくすると、おそらく部員であろう人が顔を出した。

「なんですか？」

「夏目さんはまだ部室ですか？」

「夏目？ああ、華だったらとつくに帰ったよ。20分前くらい」

「帰った？：そうですか。わかりました」

俺は部室を後にした。どういうことだ？一応家にも電話をかけてみた。

「もしもし、夏目ですが」

「あの、深山ですけど、華さん帰ってますか？」

「深山君？いえ、まだですけど。学校じゃないんですか？」

「あ、いや、その：：またかけますんで」

変な電話の切り方をしてしまったが、それよりこれはどう考えてもおかしい。

学校からとつくに帰っているのに家にいない。

ここから華の家までは10分もかからないはずなのに：

おかしい！俺は次々に浮かぶ嫌な予想を振りきり、走って校門に向かった。

「京さん、どうです？いました？」

「なんかおかしい！ついてきてくれ！」

「え、京君！おい！」

俺は華の帰宅路を無我夢中で駆け出した。後ろからは二人が必死についてきている。

よく華と登下校した道だ。大丈夫。万が一のことなんかあるわけない。

何も無い、何も無いはずの路地で俺の足が止まった。

万が一のことなんて：

…街灯の下に誰かが倒れている。

俺は血の気が一気にひいた。

…華だ、華だった。俺は倒れている華の側に駆け寄った。

「大丈夫か！華！」

俺はとりあえず華を仰向けにしようと思をかかえた。

すると生暖かいものが手にベツトリついた。…血だ。

「おい、華！しっかりし…」

ふと、誰かの気配を感じて顔をあげた。

そこには女の人を立てていた。何か言ってる。

「あ、あの、そその女の子、し、死んじゃった？」

あきらかに動揺している。

「…あんたがやったのか？」

「ち、ちが、脅かすだけだったの、ほんと」

彼女はガタガタとふるえている。おそらくこの人がそのレギュラーから外され、華を苛めていた先輩だろう。そして、右手には血がベツトリついたバットを握っていた。

俺は思いつき彼女を睨んだ。

華の頭の傷口を抑えていた手の震えが止まらなかった。

震えたら傷口を動かしちゃって痛くないかな。

震えるな、震えるな…混乱してるな俺。

遅れてやってきた直也と沙紀ちゃんは、その異常な光景を目の当たりにして心底驚いただろう。血まみれのバット、俺に抱えられた血まみれの華。

「き、京君これは…」

「な、直也！救急車！」

「え、あ、うん！」

沙紀ちゃんの足はガタガタ震えている。

俺は華の顔を覗き込み、必死に呼びかけた。

「おい、華！おきろよ！華！」

すると、華はうつすら目をあけ、そして何か呟いている。

「な…から…」

「え…何て？」

俺は華の口元にできるだけ耳を近づけた。

「…こ、転んじやった。その…人は関係ないから…ね？」

…俺は弱々しい華のその言葉に、酷く感銘を受けた。

ここまでされても華は自分に罪を感じているのか、自分をバットで殴った先輩をかばおうとしている…

お前ホント馬鹿だな！っていったつもりだったのに、声が震えて何って言ったか自分でも分か

らなかつた。

目元が、喉が熱い。目から涙が溢れてる。

華の気丈な心に俺の心はすっかり打たれていた。

「お前なあ…死んじゃうかもしれないのに…何、他人の心配してんだよ！」
言葉が途切れ途切れになる。

にっこりと、華は俺に向かって微笑んだ。

…そして、華はゆっくり目を閉じた。

大丈夫、気を失っただけ。

明日にでもとはいかないだろうけど、また一緒に学校に行ける。

大好きなバレエもすればいい。

転んだだけなんだろう！？それで死、し、死ぬやつなんかじゃないだろうお前は？

大丈夫、大丈夫…。

救急車は？早く来いよ！今にも大切なものが消えそうなのに…。

いや、大丈夫だって、落ち着け…！

…そして、救急車が到着。直也はパトカーもよんでいた。

おそらく華を殴ったであろう女の人はパトカーにおとなしく乗っていった。

救急車は俺たちを乗せて御神町内の病院へ向かった。

…手術中のマークが点灯しだしてから2時間ほど経過した。

椅子には俺、直也、沙紀ちゃん、そして華の両親が座っていた。

「手術中」が消灯した。

ドアが開き、白衣をまとった男の人がこっちに向かっている。

「…どうですか？」

俺達は医者への返事を待った。

「…なんとか一命を取り留めました。命に別状はありません。あと2週間もすれば退院できるでしょう。ですが、それまでは絶対安静です」

「ほんとうですか？ありがとうございます！」

…よかった。ほんとに良かった。

心の底から安堵のため息がもれた。

誰かが肩をさすってくれた。直也と沙紀ちゃんだ。

だから俺と華はそんなじゃないって…。

と、いってもあんだけ泣きじゃくってたんだから言い訳するのも無理か。

でも、泣いてたのはあいつの気丈な心に打たれたからだって！

いや…ほんとはあいつの事が好きなのかな？俺。

まあいいやそんな事。とにかく…もう今日は疲れた。

「じゃ、僕らは明日も学校なんで帰ります。お大事に」

俺達は華の両親にお辞儀をした。

「本当にありがとうね、深山君に桜川君に藤森さん」

向こうもお辞儀を返してきてくれた。目元は潤んでいたが、笑顔だった。

これで安心して帰れる。

俺達は家までそれほど距離は無いから、歩いて帰った。

ふと、華が2週間退院できないとなると一緒に合宿に行けないな、なんて考えた。

とにかく、今日は本当に疲れた…。

空は闇、。

雲が…雨雲が星を、月を、空を覆っているが…

ほんの少しだけ月明かりが差し込んでいた。

第2章く青空く

そして、6月13日。

―合宿初日

夏、と呼ぶにはまだ早い気もする。なんでこんな時期に合宿なんだろう。

バスの窓にあたる雨を見つめているとなんか物憂げになってきた。

フロントガラスを絶えずワイパーが磨いている。

俺達1年生はバスに揺られて山を登り、学校で借りたらしい宿舎に向かっている。

華はやはり来ていない。あの事件から十日ほどたったが、まだ絶対安静らしい。合宿に来れな

いのはすこし可哀想だ。

華が座るはずだった席を見てみた。

空席。

だが、隣にはいつもの様に窓の外の景色を物憂げな顔で眺める月海さんの姿があった。

…ちよっと元気が出てきたかも。

「晴れない顔だね」

隣の席の水戸が話し掛けてきた。うちのクラスの委員長で、グループの班長だ。

何故か俺たちのグループに入ってきたんだよな。今晚あたり理由をきいてやろう。

「そういえばここ10日ほど夏目さん休みだよね。深山君、何か聞いてる？」

「ああ、華か？あいつは…事故、そう、事故って今入院してる」

華の事件を学校側は、変な噂がたたないようにあえて「事故」と生徒には伝えている。

「事故って言うのは知ってるけど、何？交通事故？」

「ん？そうなんじゃないの。詳しくは知らない」

「無責任だねー。恋人なのに」

「違うっつーの」

「え？あれってほんとじゃないの？」

「違うよ」

「じゃあ、夏目さんが誰かと付き合ってるって事は無いんだ」

「そこまで知らねーよ」

…ん？今の質問はおかしいな。

華が付き合ってるかどうかなんてどうして聞くんだ？

まさか、こいつ華に惚れてんのか？

…ま、あいつはもてるからな。別に不思議じゃない。

俺がそんなことを考えてるのに気付いたのか気付いてないのか、水戸はヘッドフォンを耳に当て、腕を組んで音楽を聞く体勢に入った。

俺も音楽を聞こう。直也に借りたラルクのMDを鞆から取り出した。それをウォークマンに

セツトして、イヤホンを耳につけた。旅にぴったりなんだよなラルクは。
…だんだん眠たくなってきたので俺は一眠りすることにした。

ドンッ！

「うわっ！」

突然の轟音に俺は飛び起きた。将の奴がケタケタわらっている。コイツ、俺のウォークマンのヴォリュームを最大にして再生しやがった！

…心臓がバクバクいつている。

「脅かすなバカやろお！」

「ケケ、ついたぞ京介」

外を見ると、生徒がぞろぞろ建物に入っていく姿が見えた。

建物の看板には「澄江ライジングサンホテル」と、なんか仰々しい名前が書いてある。俺たちの合宿の宿舎だ。

「はい、次は2組が降りる番です」

大石の号令とともに生徒はぞろぞろバスを降りだした。俺たちも宿舎に向かった。

「304、304…あ、ここか」

俺達は自分達の部屋の前で立ち止まった。

「ここだ、まちがいねえな」

将が勢い良くドアをあけた。

部屋はベッドが二つ、その奥は和風の部屋で、テーブルが一つある。きつと寝る時はテーブルをどけて布団をひくのだろう。

「水戸、まず何すんの？」

「ああ、整備係…明石君は部屋のキズの点検。保険係…室井君は体調不審者のチェックで…」
「食事係は？」

「ん？今は別に何も」

ということとは俺は今は自由の身。

さつそく俺は303…、直也の部屋に向かった。

「おーい、直也ー…」

「あ、京君」

直也はダツフルコートをなよなよ脱いだ。するとタイトなセーターを中にきていた。お前の顔でそんなかつこうされると下手な女よりも、なんていうか、全然可愛かった…。…ってホモか俺は、怖い怖い。直也に感化されるところだった。

「かわいいーなお前！」

直也の頭をくしゃくしゃした。

「京君に言われるとうれしいよ」

「よせよ、気持ち悪い」

直也は露骨にガーンッ…という顔をしていた。旅行だからか俺達も結構テンション高いようだ。直也と同じ班の男子たちは俺たちの仕事を見ていた。

「仲良いね君、俺たちが桜川に可愛いつつても『バカにしないでください』とか言ってたのに…」

分かってないなー。こいつら。直也はこう見えても結構プライド高いんだよ。

「俺は特別なの。行こうぜ直也」

まわりに羨ましがられながら俺は部屋から出た。

直也はその後をトコトコついて来た。

「売店にお土産を見にいこうよ」

「ええ？まだ早いだろう？」

「いや、意外と買うタイミングを逃しちゃうもんだよ。見るだけ見ようよ」

「あー…。ま、暇だしな」

俺達は売店へ向かった。するとそこには…

「あ、京さんに直也くん」

「オッス沙紀ちゃん」

「あ、沙紀さん」

いきなり軽音三人衆がそろった。

：俺はこの面子が好きだ。

何故かと言うと、沙紀ちゃんも直也も美男美女、自分で言うのもなんだけど俺も結構中性的でカッコいい顔だななんて思ってる。ちよつとナルシシーだけどそう思う。

この三人が歩くとたまに人とすれ違った時、たまに「かっこいいー」「いいよねあいつら美男美女で」なんて聞こえてくるのがたまらなく快感：

そういう点では将はブサイクじゃないけど：：：なんというか濃い顔だから肩を並べたくない、というのはいどいかな？

「沙紀ちゃんもいっしょにお土産みよつか」

お土産を三人で見ることになった。しばらくお土産を眺めた後、俺達はロビーの椅子に腰掛けたくつろいでいた。俺は大好きなコーラを、直也はミルクティー（砂糖多め）、そして沙紀ちゃんはオレンジジュースを飲んでいた。

「今日の予定は？」

「えっと：：確かこの後はホールで映画鑑賞です」

「映画かー。京君好きな映画とかある？」

「俺？あー、面白い映画」

「あはは、そのまんまですね。直也君は？」

「僕？んー、僕は役者で見ちゃうかな」

「トム・クルーズとか好きじゃなかった？お前」

「あ、好き好き！彼ね、ミッションインポッシブルなんかものすごくカッコいいよ！」

「沙紀ちゃんは？」

「私は…家族の絆に弱いですね」

「あ、だったらレインマンなんてオススメだよ」

「トム・クルーズじゃねえか」

いつからだろう、俺は将達のグループよりもこっちの方が「合ってる」気がしていた。だからさっさと部屋を抜け出して直也の元に向かった。

沙紀ちゃんに出会った時も嬉しかった。

…なに俺一人で幸せ感じちゃってるんだろ？

「あ、そろそろ時間ですね。行きましょう」

俺達はホールを訪れた。

席は自由のようなので、三人並んで座った。

他の生徒もぞろぞろ集まりだし、そして全員が集まった。ホールはざわついている。ホールの前で校長先生がマイクを持って喋りだした。

「今日見る映画はレインマンといって…」

「プッ！」

俺たち三人は吹き出してしまった。そんな偶然アリかよ！？

…ちらちら視線が気になったのでコホンと咳払いをして姿勢を整えた。

そして映画が始まった。

俺はこの映画を見るのは2回目なので、話の内容はわかっていた。弟と自閉症の兄が旅をするうちにその絆に目覚めるという内容だ。大まかに言うとうと。

トムクルーズはもちろん、ダスティン・ホフマンの名演技も素晴らしい。

…なんて思いつつ、眠りから覚めて気が付けば映画は終わってた。

「おはよう京君」

直也が俺を起こした。沙紀ちゃんは目が真っ赤だ。

「あー、沙紀ちゃん泣いてる！」

「な、グス、ないて、ないです！ぐす」

おもいっくそ泣いてんじゃん…。俺と直也は微笑ましげに彼女を眺めた。

「次の予定は？」

「ぐす…いったん部屋に戻って入浴準備です」

しっかり者の沙紀ちゃんがいると何かと楽だ。

「んじや、二人風呂上がって暇だったらロビーに来てよ。食事時間までなんかしようぜ」

「僕トランプ持っていくよ」

「んじや、バイバイ。顔洗いなよ沙紀ちゃん！」

俺達はそれぞれの部屋に戻った。

部屋に入った途端、将の耳障りな笑い声が耳に入ってきた。

「ギャハハ！おい、見ろ！京介！」

将がオタクの園田を指差して笑っている。そういやこいつもうちの班だったな。園田は何かを隠している。

「隠すなよオラ！」

佐藤が園田の隠していた何かを取り上げた。

：Tシャツだった。別に極普通の白いTシャツだ。

ただ、月海さんのイラストがTシャツにプリントしてあることを除けば。

イラストだが、明らかに月海さんだった。

「ああー!？」

イラストが上手いのがせめてもの救いだったが、俺はものすごく不愉快になった。

「園田、なんなんだよこれ」

「あの、あれ、俺好きだから、彼女」

「ははは！良かったな深山！同類だぜ！」

「誰が同類だって？」

明石の言葉に俺はカチンときて、つい強い口調で言い返してしまった。

部屋の空気は一気に険悪なムードになった。

明石と俺はにらみ合いになっている。

「もうよせよ」

水戸は気をつかって止めに入った。

明石は立ち上がり、俺の横を素通りしていった。

「てめーが余計なもんもってくるからだよ！このオタク！」

途中明石はそう言い放ち、園田のケツを蹴り飛ばして外に出て行った。

「京介、何切れてんだよ」

佐藤が俺に言った。

「うるさいな。そのTシャツ捨てとけ」

佐藤と将は訝しげな顔で俺を見ている。

居心地が悪い。

俺は入浴の用意をして部屋を出て行った。

俺は浴場に向かった。

風呂をすましてロビーの椅子に座り、コーラを飲む。

普段ならこの行動はなかなか快適なものだろう。でも、さっきの事もあって俺は妙にイラついていた。

目の前の自販機に早く直也か沙紀ちゃんか、ジュースを買いに来てくれ…。

一人でいるのは辛い。

…そのとき、目の前の自販機に風呂上りのたおやかな少女が訪れた。沙紀ちゃんではない。それは月海さんだった。浴衣姿に少し濡れた長い髪が色っぽい…

月海さんは100円玉を二枚入れ、俺と同じコーラのボタンを押した。しかし、コーラは出てこない。

2、3度押ししても反応は無い。売り切れではない。自販機の10円切れだ。

月海さんは財布の中を探ったが、10円は無いらしい。

彼女はあきらめておつり返却のボタンを押した。

カランカランと2枚100円玉が落ちる音がした。

「あの…」

自分でも驚いた。

俺はあの月海さんに声をかけている。

月海さんはそっとこっちを半身で振り返る。

月海さんと目が会った。

心臓が激しく脈打つ。

俺はできるだけ平常を装った。

「20円ないんでしょ、はい」

俺は月海さんに近づき、20円を差し出した。彼女からいい香りがする。

20円あげようか？なんて聞くと断られそうなので、半ば強引に渡すような形でお金を差し出した。たのむ、受け取ってくれ！

「…」

すこしの沈黙の後、月海さんは口元をすこし緩め、浅くうなずいてくれた。

彼女なりの「ありがとう」なんだろう。

そして、俺は20円を渡した。

まだ会話までは許してくれないか…。それでもいい。

お金を渡す時、かすかに彼女の手指が触れた。

彼女は再度お金を自販機に入れ、コーラを購入し、2階へ上がった。

俺はまた椅子に座った。

指には彼女の手に触れた感覚が残っている。あのいい香りも覚えている。

彼女は俺に微笑んだ。少なくとも嫌われてはいないということか？

なんとというか…幸せだった。至福の時を過ごした感じだ。

そのとき、ふと華の顔を思い出した。

俺は幸せを感じているが、それを感じた分、あいつが可哀想になってくる。

俺は携帯を取り出して、華にメールを打った。

「元気か？こっちはケツコー楽しい。早く良くなれよ」

送信完了。

今思うと風邪じゃないんだから「早く良くなれよ」は変だったかな？なんておもった。

「あ、京さん」

風呂上りの沙紀ちゃんが現れた。可愛いけど、色っぽさと美しさでは月海さんには勝てないな。良い線いってるけどね。

「やー、沙紀ちゃん」

沙紀ちゃんはポカリを買って俺の前の椅子に座った。

「遅いね直也の奴」

ふと、沙紀ちゃんが俺の顔をまじまじと覗き込んでいることに気がついた。

「ど、どーしたの？」

「京さん：なんか良いことありました？」

わかっていたが：改めて思った。なんて鋭い子だ沙紀ちゃん！恐るべし…。

「あ、はは。ホント鋭いねー」

「人の表情読むのは得意なんですよ。さては：」

彼女は顔を近づけてこっそりこう言った。

「月海さんって人と何かあったんですか？」

「ブッ！」

一瞬、心臓が割れそうなくらい激しく脈打った。

コーラも少し床に吹き出してしまった。

「な、な、なんで分かったの!？」

「京さんのあの人を見る目、違うんです。さっき降りてくるとき階段で月海さんとすれ違ったし」

この子は読心術でももってんのか!？」

「確かに凄い魅力的な方ですよね彼女。1組でも有名ですよ。京さんが惚れるのもわかるな」

「いや、惚れてるといふかなんというか、そう、憧れだよ憧れ」

「どうでしょうねー？」

今日の沙紀ちゃんは妙に意地悪だな…。

「ごめん、遅くなっちゃった」

そこへ直也到着。直也はカップの方のミルクティーを買ってこっちに来た。

何故カップかというと、砂糖を増量できるからだろう。直也は超甘党だった。

「あ、直也君」

「よー直也。遅かったな」

「ごめん。入浴係の仕事があつて…」

「あ、そうか入浴係か。沙紀ちゃん、食事係？」

「あ、京さんも食事係ですか？私もです。集合は30分後ですな」

「オツケー。じゃ、直也トランプもってきた？」

「うん、あるよ。はい」

直也の持ってきたトランプで、俺達は短い時間で何回も遊べるポーカーをした。

一回直也がストレートフラッシュを出したのにびっくりした。

わずか30分の中で出すとは…やるな。

そして俺と沙紀ちゃんは食堂へ向かった。

食事が人数分あるかどうかの点検のみらしい。

6つあるな。今日のメニューは和食だ。よし、仕事終わり！
すっごく楽しかった。

そのとき、月海さんの姿を発見した。彼女も食事係か…。

俺は席についてみんながくるのをまつた。

水戸と園田が着席。将と明石と佐藤が来てない。

遅いなー。と、思っていた矢先、担任の大石が水戸に近づいて何か喋っている。
なんだろう？二人とも深刻な顔だ。

「水戸、どうしたんだ？」

「…あの三人、タバコ見つかって明日まで謹慎だった」

俺はそれを聞いて心底あきれた。あいつらだけは…ホントバカだな。

ま、いいか。

明石の顔はさっきの事もあってちよつとの間見たくないところだったし。

そして俺たちの班は三人で食事を済ませた。

「あー、満腹！」

大して美味くは無かったけど、お腹が減っていたので思ったより箸が進んでしまった。

と、そこへメールが入ってきた。華からだ。

「アタシは暇だ！暇暇！あ、そうそう、お土産忘れないでよ。チョコがいいな。しょーもないキーホルダーとか買って来たら怒るよ！将君と直也君と沙紀ちゃんにヨロシク！じゃー

ねー☆」

よかった、華は元気そうだ。といつても、メールを見る限りだが。

ちなみに、沙紀ちゃんは華が入院してから二日後くらいに俺たちとお見舞いに行った。

俺と直也が帰ってからも二人で2時間ほど話をしていたらしい。

今では沙紀ちゃんと華はすっかり仲の良い友達だ。

そして俺達は食堂を後にして自分たちの部屋に戻った。

「くっさー…」

部屋はとてつもなくヤニ臭い。

これではれない方がおかしい。

「あれだ、へへ、いい、気味だよ」

園田がなんか言ってる。でも俺と水戸は相手にしない。

それよりも俺は予てから水戸に聞きたい事があった。

「そういえばさ、水戸。なんで俺たちの班に来たの？」

水戸が歯磨きをしながら「ちよっと待って」の合図をだした。∴俺も、しとこ。

俺は洗面所で歯を磨いた。

ちなみにこの部屋は洗面所とトイレとバスが一体化している。

歯磨きを済ませた俺たちは歯ブラシを鞆にしまった。

そして入れ替わりに園田がトイレに入る。

「お前だったらスポーツ軍団に入るかなー？って思ってたんだけどね」

そう。水戸はサッカー部だからな。スポーツ軍団に水戸がいないおかげで文化部ともスポーツ

軍団ともつるんでる奴がスポーツ軍団にまじってた。

水戸はしばらく鞆の中を無言であさってこういった。

「だってさ、俺が行かなきゃお前ら絶対余る園田を苛めるだろ？」

それが理由？嘘だー。

お前そんな立派な奴だったの？と、言いたいけど我慢した。

苛められるのが直也とかだったらかばう気持ちも分かるよ。

でも園田だぞ…？

と、そこへ園田がトイレから出てきた。別に話は聞こえていなかったようだ。

「園田、他に月海さんグッズはあるの？」

「あの、あれ、ちょっとまって」

園田が鞆をあさる。

「タ、タ、タオルとハンカチ！照れるなーあと…」

まだなんか出てきそうなので俺はもういい、と園田を静止した。

「あれ、室井達が出たと言ったとおり深山君も好きなんだね？あやりんが」

あやりん？彩目（あやめ）さんだからか？

何勝手にあだ名作ってんだこいつ。

「あーもう、お前と一緒にすんなよバカ」

俺はもうあえてあだ名についてはつっこまなかった。

「か、彼女、喋りかけても全然答えてくれないんだ。笑ってもくれない」

あたりまえだ。

お前なんかは彼女の言葉を受けられるとしたら「もう話し掛けないで」ぐらいだろ。

園田の相手に飽きた俺はふと水戸の方を見た。

ウォークマンで何か音楽を聴いている。

俺は水戸の方に手を振った。すると水戸はヘッドホンをはずして

「何？」

と答えた。

「何聴いてんの？それ」

「Mr. BIGだよ。深山君、軽音部だったらしってるでしょ？」

「もちろん。俺、ポールは尊敬してるし」

「おお、やっぱり？いつ聴いてもあの早弾きは見事だよね」

「そうそう。もはや芸術って感じ。なかなかいい趣味してんじゃん水戸」

音楽野郎は音楽の趣味で通じ合えるのだ。

だが逆に趣味が相反していると喧嘩を招く場合もある。

今で言うと、パンクとヴィジュアル系なんかが良い例だ。

「深山君は？バスの中で何か聞いてたよね」

「ああ、あれは友達に借りたラルク聞いてたの。旅に最適」

「へー。深山君自身はなんかもってきたの？」

「俺はニルヴァーナとかメタリカとか……」

「メタリカ？いいよねあれ！」

水戸は意外にも結構なHR/HM好きだった。

結局その晩は水戸の奴と就寝時間までロックについて語っていた。

なかなか分かる奴だ。俺と水戸の仲は今日という日で一気に縮まった気がした。

園田はとうとうずっと部屋の隅で何かの本を読んでいた。

―合宿二日目

「おはようございます、皆さん今日は…」

朝の放送で俺たちは目覚めた。

まだ頭がボーっとしている。もう一眠りしたいが、無理矢理体をベッドから起こした。外を眺めると、昨晚雨が降ったのか木々に幾つもの雫がかかっていた。

空はほんの少し曇っていたが、太陽は見えた。

「水戸、今日の予定は？」

「まず朝食、その後はクラスごとのオリエンテーション。そして、いったん部屋に戻って昼食」

「あー、俺食事係だ。行かなきゃ」

俺は食堂に向かった。

食堂にはすでに沙紀ちゃんがいた。奥の方には月海さんもいた。

「そういや、彼女達も食事係だった。」

「沙紀ちゃん、オハヨー」

「あ、京さん。おはようございます」

「きいてよ沙紀ちゃん。うちの委員長が実は音楽好きでさ、なかなか話せる奴なんだこれが」
俺は昨日の水戸とのやり取りを適当に話した。

「へー。何か楽器はやってるのかな？その人」

「いや、やってないらしいよ。本人いわくむいてないんだって」

食事係の仕事……といっても見るだけだけど、それを終えた俺たちはしばらくなんて事の無い話をしていた。そのうち、ぞろぞろと生徒達が食堂に入ってきたので、俺たちは自分たちの席につき、そして食事を済ませた。

部屋に戻った俺たちはオリエンテーションの準備をした。筆記用具としおり……と。

「なあ、水戸。オリエンテーションってなにすんの？」

「多分、自己紹介とか軽いゲームなんかするんじゃないかな？」

「自己紹介？だるいなー」

「ホント」

さてよ、自己紹介といえは……月海さんの自己紹介もあるわけだ。

これはなかなか興味津々な企画じゃないか！少し楽しみができた。
そして俺たちは1年2組のオリエンテーションルームに向かった。

途中の階段で月海さんを発見。

よし、彼女もちゃんと目的地向かっているようだ。あたりまえだけど。

そう。あたりまえなんだけど、何故か彼女の自己紹介なんてそう簡単に見られないような気がしていた。

…変かな？

そして、オリエンテーションルーム。

そこには予想外のうつとおしいやつらがいた。将、明石、佐藤の3人だ。

このオリエンテーションだけに参加をさせてもらえらしい。

「えー、まずはみんなに自己紹介してもらいます。各自、名前と好きなもの嫌いなもの、趣味を一人ずつ言っていてもらいます」

まわりから「げー」「恥ずすぎるってー」という声が聞こえてきた。

ちなみに出席番号順に並んでいるので、俺の隣には水戸と将がいる。

水戸、深山、室井の順だ。

将が茶化してきた。

「好きなもの、月海さんだろ？」

「うっせー。だったらお前は夏目さんになる訳だ」

一瞬、となりの水戸が俺たちの会話に反応したように見えた。

やっぱり華のことが好きなかな水戸の奴？

とにかく、自己紹介が始まった。

一番は明石からだ。まさかイキナリそんなことを言うとは思ひもよらなかつた。

「明石 正信。好きなものは月海さんです！」

クラスに歓声が沸き起こる。俺は月海さんの方をチラッと見た。

みんなの視線が気になるのか、少しうつむいて、顔はほのかに赤らんでいる。照れる姿も可愛らしい…。

「先を越されたな？」

いちいちうっとおしい将の奴。

「嫌いなものは、デブとオタクです！」

クラスに笑いがどつとあふれた。デブっておそらく佐藤のことか。佐藤は黙って目をつむって腕を組んでいる。ひよつとしてマジに怒ってるのか？

「伊藤 忠雄です。好きなものは…」

そんな調子で次々に番が回っていった。

だが、問題は佐藤の番に起こった。

「佐藤 幸一。好きなものは月海さんです」

佐藤は明石の方を向いてそう言い放った。

なんだよこいつら、好きって言ったたりむかつかつかって言ったり。どっちかはっきりしろよ、腹が立つ。

月海さんも2回目となると慣れたのか、あきれたのか、頬杖をついて遠くを眺めている。

「嫌いなものは明石です」

クラスがおおー、とわいた。

「うるせーデブ」

明石が佐藤に言い放った。

「なんだこのブサイク」

やれやれー、とおおる男子。女子も好奇心の目で二人を見つめている。

明らかに二人は険悪なムードだった。

「こら、やめなさい二人とも」

大石の頼りない一喝は何の効果も無かった。

「元はといえばテメーがデブでトロいから俺たちまで見つかったんだろが！」

「お前がバレねえつつって自分の部屋で吸ったのがいけねえんだろーが！」

「やんのかデブ！」

「このやろオ！」

明石と佐藤は取っ組み合いになった。二人を囲むようにクラスの連中がたかりだした。月海さんは席を立たず、いつもの頬杖。二人には目もくれない。

「やめなさい、やめろって！」

大石が必死に止めるが、すぐ弾かれる。

そして大石は違う先生に助けを求めに行った。頼りねえ。

「やめろよお前ら！」

委員長、水戸が叫ぶが効果なし。

「馬鹿かてめーら！もう一日謹慎になっちまうだろうが！」

将が叫ぶ。

「うるせえ、将！元はお前が調子に乗ってタバコを吸おうなんて言い出さなかったら俺たちは吸ってねえんだよ！」

「な…んだとこのやろオ！」

将も参戦。もう止められない。

結局、オリエンテーションは中止。

三人は保健指導の山田に張り倒されて、最終日：明日まで謹慎になったようだ…。
くっそー、お前らのせいで月海さんの自己紹介が聞けなかつただろおが！

…あれ、やっぱり聞けなかった。

…昼食を終えた俺たちは、自分たちの部屋に帰っていった。

「あれ、あ、あやりんの自己紹介聞けなくて残念だったね」

そして、園田が俺にそんなことを言ってきた。どうやら完全に同類とみなされているらしい…。

でも確かに聞けなくて残念だった。

「ああ、ちょっとな」

水戸が急に振り返り、

「ええ？深山君てほんとに月海さんが好きなの？」

水戸としては俺が華を好きなのか、誰か他の子が好きなのか知りたところだったんだろう。

「違うよ、月海さんは美人だろ？だからそういうノリもアリかなと思って」

隅っこで園田がニヤついている。気色悪い。

「なーんだ。深山君はやっぱり夏目さんか？」

へっ、やっぱり聞いてきたな。でもまあ、思ってることを正直に答えてやるか…。

「あいつとは友達。それ以上でも以下でもないっつーの」

「ふーん。そうなんだ。結局じゃあ誰が好きなの？」

…：そーいや、誰だろ？やっぱり月海さんかな？それとも実は華だったり。

いや…：沙紀ちゃんも結構好きかも。可愛いし趣味合うし。

うーん、俺の周りには可愛い子が多いなあ。良い事だ。

「分からん」

「なんだそりゃ」

水戸は訝しげな顔で俺を見た。

「あー、それより次何するの？」

「あのなあー、ちょっとは予定表見なよ。次はまた映画鑑賞。そのあと夕食で食べ終わったから花火大会だって。んで入浴、就寝」

花火大会ねー。華、したかっただろーなあ。

映画鑑賞まで時間があるので俺はロビーにいる事にした。メールで直也と沙紀ちゃんにそのことを伝ええ、そして俺はロビーに向かった。

ロビーにはすでに直也がいた。今日はアップルジュースを飲んでいる。

俺は自販機でコーラを買って、席についた。

直也がコーラを見て

「またコーラ？好きだね」

「馬鹿野郎、ロックはコーラが定番だろ？」

「そ、そうなの…？」

「おうよもちろん。あ、沙紀ちゃんだ」

今度は沙紀ちゃんがいとも直也が飲むミルクティーを買ってきた。

そして沙紀ちゃんは俺の前の席についた。

「今日は何をみるのかなあ？」

「ズバリ、京君は何だとおもう？」

「俺？うーん、昨日レインマンだったから…スノーマンとか」

「それは無い！」

直也に即、ツッコまれた。

そんな何気ない話を俺たちは30分程したところで、沙紀ちゃんがそろそろ時間だと教えてくれたので、俺たちはホールへ向かった。

今日の映画は「マイフレンドフォーエバー」だった。

それがあったか…。沙紀ちゃんは相変わらずボロ泣きしていた。

俺と沙紀ちゃんは食事係なので、俺はボロ泣きの沙紀ちゃんを連れて食堂へ向かった。うう、周りの視線を感じる…

今日の食事はカレーだった。食べた後、口がカレー臭かったので、俺は大量に水を飲んだ。すると、急に尿意を催したので俺は一足先に自分の部屋まで戻り、トイレに駆け込んだ。すっきりした俺は今、部屋に一人ということに気付いた。

園田の鞆がある。

そして、その中には月海さんのイラストが書いてあるグッズがある。

「…」

俺は黒いゴミ袋にグッズを全て放り込み、わざわざ外のコンテナまで捨ててに行った。

「ふう。すっきりした」

仮にも「月海さんを捨てる」という行為に多少心が痛んだが、それを補って余りある充実感が

あった。

「な、な、ない！あ、あやりんグッズが！」

部屋に戻ると園田がうろたえている。いい気味だ。

「み、深山くん知らない！？僕のグッズ、グッズ！」

「知らねーよ。俺コーラ買いに行ってたから」

下に行ったついでに俺はコーラを買っていた。

「み、水戸君は！？い、委員長として没収したのか！？」

「し、しないよ。うるさいなー」

そのとき、俺の携帯が震えた。

「お、メールだ」

メールの送り主は…直也か。

「ロビーでまっています」

と、簡単な内容だ。俺はロビーに向かった。

ロビーの椅子にはすでに二人がいた。俺も腰をかけた。そして、いつものようになって事の無い会話を交わした後、時間が来たので俺たちはクラスごとに花火大会の会場である、澄江川中腹の川原へ向かった。

歩いて3分もかからなかった。

小鳥のさえずりが森に響いた。

川原は木々に囲まれて、大小様々な石が転がっており、そして静かに綺麗な水が流れていた。まだ薄暗い空が景色によく溶け込んでいる。

そこで俺たちは数本の花火を配られた。

一人一本ろうそくを配られて、担任がそれに火をつける。

俺はろうそくと花火を持って直也と沙紀ちゃんの方へ歩いていった。

「俺、花火大会…って、打ち上げ花火かと思った」

「うちの学校でそんなものがでるわけないよ」

確かに直也の言うとおりで。学年でたった2クラスしかないんだもんな。

「でも、綺麗ですよ」

俺たちはしばらく勢いのある花火で遊んだ。

そして最後は線香花火の魅力に吸い込まれた。

「綺麗だなー」

花火は明るい雫を中心に不思議な閃光を放っている。

直也の雫が落ちた。

「あーあ…直也は短命だな…」

「き、京君。線香花火と僕を一緒にしないでよ…」

そのうち俺と沙紀ちゃんの線香花火も落ちた。

花火大会も終了し、帰りもクラスごとだ。

宿舎に帰って、浴場で入浴。今日は1組からだった。

1組が上がった後、俺達はゆっくり風呂に浸かった。骨の髄まであったまるく…なんていったら水戸のやつに「おっさんだなー」って言われた。失敬な。

そして、風呂上り。お土産を買うので、ロビーにあいつらを呼ぼうと思ったときだった。そこで俺は大変な事に始めて気付いた。

「…け、け、携帯を川原に忘れた!」

温まっていた体が一気に血の気がひいたかのような感じに見舞われ、寒気に襲われた。

俺は浴衣のまま川原に突っ走った。

夜の川原は全くの闇かと思ったが、十五夜の月明かりに照らされてとても綺麗な景色だった。川にもぼっかりと満月が浮かんでいる。

静かな川のせせらぎが心を落ち着かせる。小鳥のさえずりは聞こえない。

俺は早速自分の携帯を探し始めた。

5分くらい探しただろうか、半ばあきらめかけていた時…

突然背後に気配を感じた。

：振り返った瞬間、これは夢かと思った。

そんな事が現実であるわけがない。あるわけが：

「月海さん：？」

そう、あの月海さんが立っていた。

浴衣姿の月海さんは月を背に、ほんのすこしだけ笑顔で俺に携帯を差し出している。

俺はそれを受け取った。

「あ、ありがとう。月海さん、どうしてここに？」

月海さんは黙って俺に背を向けて、大きな岩に腰掛けた。

そして、静かに手招きをしてくれた。

俺は緊張に震える足を動かし、月海さんの隣に腰掛けた。

心臓が月海さんに聞こえるんじゃないかと思うぐらい激しく鼓動を刻んでいた。

月海さんは黙って何かをこっちに差し出した。

コーラだ。

「あ：：どうもありがとう」

コーラの缶の飲み口を開け、俺は一口コーラを喉に運んだ。

同じ事を月海さんは俺の隣でしている。

そして…ついに。

やっと、月海さんが始めて俺に言葉を許してくれた。

「…深山君を追いかけてきたの」

透き通った、はっきり聞き取れる美しい声だった。

「え？」

「昨日のお礼しようと思って」

「あ、はは…わざわざありがとう」

そして…しばし沈黙。

俺はその沈黙が怖くて急いで次の言葉を搜した。

このまま喋らなかつたらまた永遠に口を開いてくれないんじゃないか？
そんな気がした…

「あの…どこにあったの携帯？」

「…今腰掛けている岩の陰よ」

「よくみつけたね」

月海さんはポケットから袋とライターを取り出した。

「それ、今日の花火：しなかったの？」

「：クラスの人達とする気が起こらなかったから」

彼女は淡々と、そしてはつきり俺の問いに答えてくれる。

彼女は俺に線香花火を差し出して

「する？」

と一言。

「うん」

俺はそれを静かに受け取り、彼女は黙ってそれに火をつけてくれた。

あの、無表情で誰とも口をきかない彼女が俺と二人きりで花火をしている。

その事実を未だに俺は信じきる事ができなかった。

でもこれは現実だ。

どういふわけか俺に対して彼女は心を許した。

俺の心は躍った。

線香花火の灯を眺めていると、何故か出にくかった言葉が勝手に口を開き出て行く。

「月海さん、どうして誰とも喋らないの？」

彼女は少しの間線香花火を眺めていた。

：そして雫が落ちた時、こう言った。

「私、人が信じられないの」

それはとても悲しい理由だった。

でも、どうして…

いや、そんな事は今はどうでもいい。

…それも俺の憧れの月海さんだった。

そして、俺を信じてくれたと言う事でもあるのか。

「俺には口を開いてくれたね」

「…深山君は信じられる。そんな気がしたの」

嬉しいけど…少し照れくさかった。

「これから俺に口を開いてくれる？」

「ええ。…迷惑でなければ」

「迷惑なもんか」

「ありがとう」

俺の線香花火も落ちた。

すると彼女はもう一本俺に渡して、そしてそれに火をつけてくれた。

今の月海さんはいつもの冷たさを微塵も感じさせず、限りなく優しくかった。

二人はそれぞれの線香花火が放つ輝きを吸い込まれるように見入っていた。

今の俺は幸福感にまみれていた。

今が永遠に続けば良いのに…

「月海さん、いつも一人だったよね？」

「…ええ」

「辛くないの？」

俺だったら絶対に絶えられない。

「…辛いのは慣れてたから」

その言葉聞いて俺は心が痛んだ。

やっぱり、辛かったんだ…

「これからは…俺でよかったらあてにしてよ」

「ありがとう」

そう彼女が言った直後、二人の線香花火の雫はほぼ同時に地に落ちた。

俺と月海さんは宿舎に戻った。

宿舎、俺と月海さんは一緒に入り口をくぐった。

「いっしょにお土産、見ない？」

「ええ、いいわよ」

俺と月海さんは売店へ向かった。

クラスの連中は俺が月海さんと歩いているのを見て、かなり驚いているようだ。

そしてその視線も俺にとつては幸福だった。

優越感だろうか。

そう、俺だけが彼女に近づく権利を持っている。

「みんな驚いてるな」

「迷惑じゃない？」

「いや、むしろいい気分。月海さんは美人だから」

「…私が醜かったら私とは歩かない？」

「…俺、顔は心を映し出す鏡だと思ってるから。心が清い月海さんが醜いなんてこと無いって」

俺ってキザだな…。いつからこんなキザになったのか…

「だったら私、醜いはずよ」

「え？はは、まさか。」

冗談にもとれるが…

なにか…そう、俺は不吉な影を月海さんに感じた。

…いや、きつと気のせいだ。

…そういえば華のやつがチョコを欲しがってたな。

俺はチョコのお土産、家族と華の分を購入した。

「月海さんは？何かお土産買わないの？」

「私は：一人暮らしだから」

「一人暮らし：？」

少し彼女の顔が暗くなったので、俺はあえてそれ以上何も聞かなかった。

お土産を買った俺は、いつものロビーの椅子に向かった。

月海さんは俺の腕をつかんだ。

すこしドキッとした。

「どうしたの？」

よくみると、椅子には直也と沙紀ちゃんが座っていた。

「彼らは：信じていいの？」

「俺を信じてくれるなら：信じられるよ」

彼女は少し笑顔でうなずいた。

俺と月海さんは椅子の前まで歩いていき、立ち止まった。

大丈夫。こいつらは信じられる。

「よお、直也に沙紀ちゃん」

「あ、京く：」

直也と沙紀ちゃんはとても驚いていた。

「月海 彩目です」

月海さんは軽くお辞儀をした。

「あ、桜川 直也です」

「藤森 沙紀です」

俺は椅子に腰掛けて、月海さんにも席を勧めた。

そして月海さんはそこに座った。

直也も沙紀ちゃんももすっかり固まっている。

月海さんは両手を膝元で組んで、どこか違うところを眺めている。

俺がなんか言わなきゃ：

「直也、彼女知ってる？」

「な、名前は聞いた事があったけど、こんな美人なんて思わなかったよ」

「：ありがとう」

「京さん、どういうきっかけで仲良くなったんですか？」

「うーん。：俺が20円で買ったの」

月海さんは怒るかな？って思ったけど、彼女はふふ、と一笑してくれた。

「なに20円で：」

「どーでもいいのそんなことは」

もちろんコーラの事だが、めんどくさいので俺は直也の話を遮った。

それから俺たちは彼女の趣味や前いた学校の話聞いた。

彼女は隣の日野中学から、御神高校に入学してきた。

今は御神町のマンションに住んでいるらしい。

奇遇なことに趣味は俺たちと同じ音楽で、沙紀ちゃんと同じくジャズを聞からしい。

そういうこともあって、沙紀ちゃんと話が弾んでいた。

そして、就寝時間が近づいているので俺たちは椅子を離れ、階段を上り、彼女たちとは2階で別れた。

その直後に直也がこんなことを聞いてきた。

「ほんとに美人だね」

「ああ」

「…好きなの？京君」

俺は一瞬戸惑ったけど、今でははっきり言える。

「ああ」

直也の顔にすこし驚きの色が見えた。

「好きだよ」

今までは高嶺の花だったけど、彼女から近づいてきてくれた。

手が届くようになって初めて、俺は自分の気持ちに気付いた。

そう。俺は月海さんを愛していた。

「よかったね。けど…夏目さんはどうするの？京君の事が好きなんだよ？」

直也は華の心配をしている。

「俺は…あいつの友達だよ」

「そっ…か」

直也は自分の部屋に戻った。

それを見届けて俺も自分の部屋に戻った。

「深山くん、どこいったの？」

水戸が心配していた。

「川原。携帯忘れて」

「はは、マヌケだねそれ」

俺たちは歯磨きをすまして布団に入った。

俺は今日のことを思い浮かべた。

…月海さん…ついに話ができた…。

彼女も俺とついに話ができた…って思ってくれてるのだろうか？

…彼女は俺のことをどういう感覚で想ってくれているのだろうか…？

友達？唯一信じられる人間？それとも…

「深山君…起きてるかい？」

暗闇に水戸の音が響いた。ふと水戸の方を見ると、真っ暗闇の中、水戸はベッドに腰をかけているのがかすかすに見えた。

「起きてるけど…どうしたんだ？」

「俺は君に謝らなくちゃいけない」

「ええ？」

「俺は君を利用してしようとしていた」

何を言ってるのかさっぱり分からなかった。

「俺は夏目さんが好きだ」

水戸の口から、その言葉がはつきりでた。

でも俺は大して驚かなかった。前々から感じていた事だ。

「…感づいてたよ」

「あ…そうなんだ…」

「それより…利用って何？」

なんか俺は妙に緊張していた。

周りが暗闇で、しん…としている。

「君と友達になって夏目さんと友達になろうとしていた」

「…ふーん。別にいいじゃん」

それだけでコイツは罪意識を感じていたのか…。ピュアなやつ。

「…え？不愉快じゃないの？」

「別に。紹介してやろうか？」

「…本当に君は夏目さんを好きじゃないんだね。君は誰が好きなんだよ？」

俺は一瞬ためらったけど、大丈夫。

答えは今日出たじゃないか。

「月海さん」

そう言い終わったら、ほんの数秒沈黙が流れた。俺は少し恥ずかしかった。

「よかった…そうなんだ。彼女、誰とも話をしないよね？」

そう。俺と軽音の連中を除いて。

「今日、俺話をしたぜ」

「な、な、なんだって！」

居間で園田が飛び起きた。こいつ、盗み聞きしてやがったのか！腹が立つ。

「コラ！いつまで起きとるかー！」

突然、保健指導の山田がドアを開けて叫んだ。園田が馬鹿でっかい声で叫ぶからだバカ！俺は

すぐさま寝たふりをした。

…でもいつのまにか眠っていたらしい。気がつけば朝だった。

—合宿最終日

「オハヨ、深山君」

水戸は目覚めが良さそうだ。今まで俺と華の事が胸につかえていたんだらうけど、それを昨晚話したおかげですっきりしたんだらう。

「水戸、おはよ」

俺も今日は目覚めがいい。昨日、月海さんと話が出来たからな。

「あの、き、昨日言ってたことだけど、ど、どういうことか説明してもらえるかな」

園田が俺に絡んできた。そんな園田に俺は優越感をかんじた。

「月海さんは俺を必要としてくれたんだよ」

そう。彼女は俺だけを信じてくれている。

「な、何だそれは」

「水戸、今日の予定は？」

俺はもう園田を無視して話を水戸に振った。

「今日はこれから朝食をとって、バスに乗って帰宅するだけだね」

「あ、俺食事係だ。」

園田は「きき、聞いているのか」と、どもりながら叫んでいたけど、俺は無視して食堂へむかった。

食堂にはいつもどおり沙紀ちゃんがいた。

「おはよう沙紀ちゃん」

「おはようございます、京さん」

俺は点検を済ましてしばらく沙紀ちゃんと会話を弾ませた。

そのうち、月海さんが食堂に入ってきた。

そう、彼女も食事係だ。

「おはよう、月海さん」

彼女は俺の方に振り向き、少し笑顔で

「おはよう深山君」

と、応えてくれた。

昨日生まれた絆は途絶えていない。

「おはようございます、月見さん」

「おはよう藤森さん」

沙紀ちゃんと月見さんも挨拶を交わした。

俺はまるで今までとは違う、新しい朝を感じていた…。

…俺と水戸は食事を済まし、部屋に戻ると将、明石、佐藤が謹慎処分を解かれて部屋にいた。

「よお、ひさしぶりだな」

将がこちらに挨拶をしてきた。

「楽しかったな、合宿」

俺は皮肉をこめて将に言い放った。

「ち、こんな合宿やってらんねーよ」

俺たちは帰る準備をした。

そして俺は荷物をもってロビーに向かい、いつもの椅子に腰をかけた。

ロビーではすでに何人かの生徒がバスを待っていた。

そしてまず、月海さんがやってきた。

「楽しかった？合宿」

俺は月海さんに聞いた。

「ふふ、有意義だったわ」

俺と話ができ、という意味だろうか？

「月海さん、携帯もってる？」

「ごめんなさい、私家族も友達もいなかったから…」

「そっか…」

「携帯、持とうと思うんだけどどこがいいかしら？」

「あ、持つのか？俺はドコモだけだ」

「じゃあ私もそこにするわ。どうやって買えばいいの？」

「そうだな…明日学校休みだから一緒に契約店にいこっか？」

「本当に？是非お願いするわ」

やった、デートの約束をしてしまった：

そこへ直也と沙紀ちゃんがあらわれ、椅子に腰掛けた。

「いよいよ合宿も終わりだね」

「楽しかったですね、新しい友達もできたし：」

俺たちはバスが到着するしばらくの間、合宿の思い出話に花を咲かせた。

2、30分ほどしたらバスが到着したので、俺たちはクラスごとにわかれた。

俺たちはバスに乗り込み、そして、各自の席についた。

バスに揺られながら、しばらく俺は水戸と喋っていたが、月海さんの隣の華の席が空いていたので俺はそこまで移動した。

俺と月海さんが話をしているのを、始めて見たクラスの何人かは驚いていた。もちろん、将と明石と佐藤も驚いていた。

：結局月海さんと俺はバスが御神駅に着くまでの間、ずっと喋っていた。

そして、バスを降りても俺たちは一緒に帰路を歩いた。

将達3人が、途中で「よお、京介」と言いながら俺たちの方に近づいてきたが、狙いは月海さんだったのだろうか。

「よお」

一応俺は返事をした。

「（彼らは信じられる？）」

月海さんが俺の耳元でぼそつと呟いた。

「…ちよつと無理かな？」

俺は笑いながら答えた。将達を無視して俺と月海さんは歩き始めた。

「京介、どうして俺たちと一緒にかえらねえんだよ」

俺は振り返り、一言いった。

「お前らは信じられないからだよ」

「不良だからか？」

「…さあ」

将達は舌打ちをしながら俺たちと違う道へ曲がっていった。

もう俺はあいつらといるより、直也、沙紀ちゃん、華、水戸、そして月海さんという方が楽しい事に気づいた。

俺は将達と暗黙の決別した。

梅雨とは思えない目が痛いほどの青空を見上げて、俺は至福の時を感じていた。

そして俺のすぐ側には月海さんがいる。距離だけじゃない。

わずかな時間の中で俺と月海さんの心の距離も限りなく近づいていた。

そう、今にも触れ合いそうなくらい…

第3章く真実く

夏休みも半分すぎ、あと3週間程だった。しかし、あいも変わらずセミの鳴き声、肌を焦がす太陽、汗をにじませる容赦ない暑さが毎日続く。

あの合宿から俺は学校で将達と全く会話をしなくなったが、その分華と、そして月海さんと毎日の学校を過ごした。水戸の奴も少しは華と喋っているが、この調子ではまだまだだな…としみみ思った。

…残念な事に、華はどうやらバレー部を退部したらしい。「アタシは十分大変な迷惑かけちゃったし…何よりもうバレーするのが怖くなっちゃった」華がそう言ったとき、俺は心ながらも痛かった。

夏休みに入って、俺は週3回ほどのペースで部活に行っていた。

月海さんとは毎日メールのやり取りをしている。

合宿の次の日に俺と一緒に買いに行った携帯でだ。

買った直後に俺は目の前で月海さんに電話をかけてみせ、彼女はそれに気付き、照れながら携帯をとり「…も、もしもし」って言った時は…笑ったなあ。月海さんの可愛いなの…。そのあとちよつとムツとされたけど。

ちなみに、俺はたまーに月海さんの家に遊びに行くが本当に一人暮らしだった。親のことを聞くと暗い顔をするのであえてそれ以上は聞かない。

8月14日。朝、10時過ぎくらい。

俺はファミレスでコーラを一口のみ、彼女が席についたところで話を切り出した。

「沙紀ちゃん、大切な話って何？」

今朝、沙紀ちゃんは俺に話があるといつてここに呼び出したのだが…。

心持、沙紀ちゃんの顔は暗かった。

「できれば…絶対に誰にも言わないで欲しいんです」

「ん…？うん分かった」

そう返事をするより他に無い。

そして、沙紀ちゃんのいつに無く真剣な顔を見て、これからする話の重大さに気付いた。

「私…」

沙紀ちゃんは顔を赤らめ、うつむいている。俺はコーラを一口喉に通した。

「直也君が好きなんです」

「は！？」

俺は心底驚いた。

沙紀ちゃんはその素振りを全く見せないのです、いままで全然気付かなかった。でも、それぐらいで相談するなんて沙紀ちゃんも女の子だなー：

「そ、そりゃ。うまくやりなよ：それだけ？」

「いえ：でも、直也君は他に好きな人がいるようなんです」

「どうしてそう思うの？」

「この前、好きな人がいるかっていう話になって：。直也君は「いる」って：」

「どうやら沙紀ちゃんの鋭い観察眼をもってしても、直也の好きな人は分からないらしい。」

「沙紀ちゃんの中から見ても分からないの？」

「分かりません：」

「うーん。ま、とりあえず告白しちやえば？」

「こ、怖くてできません」

「じゃ、どうしようもないじゃん」

「うーん：そ、それはそうですけど：」

そんな感じで話が進まず、結局俺が直也の好きな人を聞いてから：ということになった。

「卑怯なのは分かっていますけど：でも、もしふられちゃったら、軽音部がギクシヤクして居心地の悪いものになってしまうんじゃないかって：。言い訳ですなこんなの」

「ま、沙紀ちゃんの軽音部を大切にする気持ちは分かるよ。でも、あんまり期待しないで待っててくれよ？」

「はい…」

俺たちはファミレスから出てすぐに別れた。

…さっそく行動開始。

俺は直也に電話をかけた。

「はい、もしもし。京君？」

「今すぐ御神駅前に来い！」

「え…ご、強引だなあ。ちよつとまっててよ」

よし、来るようだ。俺は駅の入り口の壁にもたれて直也を待った。

…3分後

「お待たせ」

「は、早いな」

「そこの本屋にいたんだ」

直也はジーパンにTシャツ、袖なしのジージャンと、ラフな格好だ。

見ると手には本が1冊入ってそうな紙袋を抱えている。

「何の本買ったんだ？」

「え、これ？プレイヤーだよ」

「ああ。まだ読んだの」

直也は中学の頃から毎号愛読している。

「それはともかく、僕に何か用があるの？」

「おお。とあるお方の要望でお前の好きな人を訪ねたい」

「な、なんだよそれ！だ、誰？とあるお方って」

「それは言えない」

「と、とにかく立ち話もなんだから、そのファミレスでゆっくり話そうよ」

「…ええ？べ、別にいいけど…」

さつき出てきたばかりなのに…

ちよつと気が引けるが直也に詮索されると厄介なので、俺は仕方無しにまたさつきのファミレスに入った。

そして俺はまたコーラを頼み、直也も同じくコーラを頼んだ。

「いつも言ってるけど、そればかりは言えないよ」

直也が困った顔で俺に言ってきた。

「言わなきゃお前は退部だ！」

「いや、そんな事言われても…」

直也はもつと困った顔をした。でも俺は容赦しない。さっさと沙紀ちゃんの恋をかなえてやるうじやないか。

「なんでそんなに言えないんだよ。俺とお前の仲だろ？」

「…僕と京君の仲じゃ無くなるかも知れない」

直也はボソツと呟いた。俺との仲が崩れる？…心当たりが無い。

…ひよつとして俺の姉貴か？

「とにかく、僕は言う気は無いよ」

やはり、どうやら聞けそうにも無い。

「あーもう、分かったよ。俺のコーラ代払ってくれたら許してやるよ」

「それぐらいならするよ。ここに連れて来たのは僕だし」

半分冗談のつもりだったが、払ってくれるようなので俺は直也の好意に甘んじた。

とりあえず俺と直也は外をぶらついた。

CDショップ、ファッション街、楽器屋とまわって休日を満喫した。

そして、商店街を歩いていたら時だった。

「京介」

後ろから声が聞こえたので振り返るとそこには…

「…将」

声の主は室井 将だった。

…しかし、いつもの将では無かった。

将の顔はあざだらけで、前歯が一本欠けていた。腕には包帯が巻いてある。

「将君…久しぶり」

将が苦手な直也は少しばつが悪そうだ。

「酷い傷だな…喧嘩か？」

「ああ、みつともねえだろ？」

…妙に居心地が悪い。

俺と将の間には、合宿の日いらいすつかり溝ができていた。

そして、おそらくもう埋まることは無いのであろう。

「明石と佐藤、今日は一緒にじゃないんだな」

「あいつらとはもうつるまない」

「…どうしたんだ？」

「あいつら…女を襲おうとしやがった」

俺は一瞬、明石と佐藤の顔を思い浮かべ、そして軽蔑した。

学校の中と外とは違うと分かっていたが、そこまで堕ちた奴らだとは思わなかった。

「…誰を」

「しらねえ。そこら辺歩いてた中学生さ」

「嘘だろ…？お前は？」

「止めたさ。そしたら喧嘩になってよ。それがエスカレートしてきて…見るよ」
将は腕を差し出した。腕には包帯がしてある。

「あの野郎、明石の奴がナイフ出しやがった。このキズ、20針縫ったんだぜ？」

「ナイフ…」

「はっ。フツ、ダチ同士の喧嘩にナイフ出すか？」

将は心底怒っているように見えた。

「んで、佐藤が止めに入ってよ。刺されちまってやんの。明石は今、少年院。佐藤は病院だよ」

俺は驚きのあまり言葉を失った…

「俺達はもう滅茶苦茶だよ。あいつら失って俺は一人になっちゃった。京介、お前らは元気に仲良しごっこやってるか？」

仲良しごっこ…。将達から見るとそう見えるのかもしれない。

「…ああ」

「そうか…よかったな。華ちゃんによろしくな」

そう言うとき将は俺たちに背を向けて歩き出した。

「将…」

俺と直也はしばらく将の背中を眺めていた。

その背中はとても小さく、ボロボロに見えた。
哀れな将に俺は深く同情した。

やっぱり将は、ちゃんとギリギリの所で一線を踏まえていた。
将はただ欲望に流されず、自分の志を守った。

「今なら…少しは信じられるかもな…」

次の日…

俺と直也は暇なので、また一緒に街をぶらついていた。

いやー、学校が無いってことはいいもんだ…

昼下がりの麗らかな陽射しを受け、俺はしみじみと思った。

「どーする？カラオケでもいく？」

「じゃあ、誰か誘おうよ」

「華か…あ、たまには月海さんを誘っても面白いかも」

「あんまり人前で歌いそうに無いよ？…あ、沙紀ちゃんとかは？」

昨日の今日だ、沙紀ちゃんはまずいだろ。あんな話を俺としたところで直也と顔をあわせるのは酷に違いない。

「あ、駄目駄目。彼女今日無理らしいよ」

「あー、そうなんだ」

結局華を呼ぶことになった。華に電話。

「はーいもしもし。どしたの？」

「華ー、助けてー、変になよした奴に絡まれたー」

「…そ、それ僕のこと!？」

後ろで直也が反応した。

「あー、京介、今直也君と遊んでるの？」

なよなよした奴が直也と分かってしまうところが少し可哀想だ。

「私ねー、今彩目ちゃんところで遊んでるの。ちよつとまってね」

俺が学校で月海さんとも華とも話すので、二人は自然に仲良くなっていた。

正直、ちよつと自惚れだけど、華の奴が月海さんに嫉妬するかなと思っただけどそんな事は無いようだ。

少なくとも、表立っては…

電話の向こうで華と月海さんが相談する声が聞こえる。

「あ、もしもし?よかったらここに来ないかって」

「あ、ほんと?分かった。10分ぐらいでそっち行くぞー」

「はーい」

電話終了。

「月海さんちに行くことになった」

「え？ そうなの？ 僕月海さんの家初めてだ…」

俺たちは月海さんの住んでいるマンションへ向かった。

駅から繁華街を抜け、道路沿いに歩く。少し山を登ると、そこに月海さんのマンションがある。なかなか綺麗なところだ。

俺はオートロックのドアの前で5963…ごくろーさんと押した。適当な暗証番号だ。

ドアが開く。俺たちはエレベーターに乗って4階まで上がった。

404号室。ここだ。俺はインターホンを押した。

ピンポーン…

「はい」

「あ、深山ですけど」

「深山君？ 上がって」

俺はドアを開けた。

「おじやましまーす」

「邪魔するなら帰れ〜」

華の声が奥から聞こえた。

インターホンの受話器を直して、月海さんがこっちを見た。月海さんはスリムなジーパンにボーダーTシャツ。スマートで、女性にしては背の高い月海さんに良く似合っていた。

「どうぞ」

「あ、おじやます」

「こんにちは桜川君」

月海さんは奥へ歩いていったので、俺たちも奥に行った。

月海さんの部屋は女の子らしさは無く、しかし綺麗に整理されている。壁にはカレンダー、棚には結構な量のCDと本がある。

「華、月海さんと二人で何してたの？」

「宿題だよ。数学わかんないから彩目ちゃんに教えてもらってたの」

「あ、じゃ俺たち邪魔じゃない？」

「いや、今終わったところだから」

奥から月海さんがコーラを二杯持ってきてくれた。

「どうぞ。桜川君はコーラでよかったかしら？」

「うん、ありがとう」

「ありがとう」

俺も礼を言ってコーラをいただいた。ふと、奥の机に目をやると一冊のノートが目に入った。

「日記」とシンプルに書いてある。俺は「日記」を手を取った。

「月海さん、これ読んでいい？」

「駄目よ」

あっさり断られた。

「デリカシーないのね京介。フツー女の子の日記を読もうとする？」

「う…」

…確かにそういわれてみるとちょっとデリカシーが無いかも。

直也はCDが部屋の隅に置かれたギターを眺めている。

「月海さんギターひけるの？」

「ええ、少しぐらいなら」

俺も最初この部屋でギターをみたときは驚いた。しかも結構上手かった。

「いやいや、月海さん結構上手いよ」

ギターを弾いたり、音楽を聴いたり、華が持ってきていたプレステ（初代）であそんだり…。

結局俺たちはそのまま、晩まで月海さんの家で遊んでいた。

「あー、そろそろ帰らなきゃいけないかな」

「別にうちには家族がいらないから、いつまでもいていいわよ。何だったら泊まっていてもいいし」

「あ、アタシそれ賛成ー」

「月海さん迷惑じゃない？」

「全然。一人は寂しいし」

俺たちは月海さんの家にいきなり泊まることになった。華は月海さんの家に泊まるという事を

家に電話で話していたが、直也は少しためらっている。

「ほんとにいい？」

「寝る場所なら4人分くらいちゃんとおあるわよ。私が1人で住むには大きすぎるマンションだから」

「そっか……。じゃあ、今日はお世話になります」

直也も家に電話をかけ始めた。

「深山君は家に電話をかけないの？」

「俺？いーのいーの。お袋はいつも仕事で出張してるし、姉貴はここ何日か友達の家泊まってるから」

「お父さんは？」

「俺、親父いねえの」

月海さんは驚いている。

「ごめんなさい……」

「別にいいよ」

親父は俺が小五の時、他界した。胃ガンだった。

それからお袋は女手一つで俺と姉貴を育てた。だから仕事尽くしのお袋に対して別に不満を言わない。言えるわけが無い。

俺たちは晩飯を外で済まし、コンビニに行った。

華がお酒コーナーで立ち止まっている。口元がニヤーっとしているのが気持ち悪い。そして、突然こんなことを言い出した。

「…酒飲もっか？」

「エ…？ま、マジかよ？俺はいいけど月海さんに失礼じゃないかあ？」

「いいわよ別に。私は飲まないからみんなが酔っても大丈夫」

そう言う問題か…？

「ごめんね、彩目ちゃん。んじゃ、飲も飲も！ほら、直也君もこっちこっち！」

直也はポテトチップスをうすしおにするかコンソメにするか悩んでいた。

「え？お酒ー？いいよ僕は」

そのとき、俺は閃いた。

直也が酔えば口が軽くなって好きな人が聞き出せるかもしれない…

「駄目だ、買え！」

「え、ええ…！」

結局直也も何本かチューハイを買った。

そして、俺たちは月海さんの家にもどった。

「かんぱ〜い！」

華の乾杯で皆はグラスを合わせた。俺は安い赤ワイン、華はカクテル、直也はチューハイ、月海さんは華に無理矢理カクテルを勧められ、一杯だけ飲むことにしたらしい。

…30分程たつと、俺はだんだん気が大らかになってきた。

月海さんは1杯だけの予定が、意外にも口にあつたらしく、もう3杯ほど飲んでいる。気がすっかりしているうちに直也に例のことを聞き出そう…

「おい、直也ー」

「ん？なに？」

「教えるよお前の好きな人ー！」

「あ、アタシも知りたいそれー」

「私も少し興味あるわ」

皆が口々に直也をおおる。

「やだよー。それは言えないって」

「じゃ、みんなが一回ずつ答えていこうぜ。当たったら隠さず言えよ！」

「えー…じゃあ、一回ずつだけだよ」

華が先陣を切った。

「ズバリ、沙紀ちゃんでしょ！」

「残念、ハズレ」

華はあれー？っていう顔をしている。月海さんは顎に手をあてて考えている。

「俺は知ってるぜ」

そう、俺は自分の姉貴と睨んでいた。

俺と気まづくなるんだろ？こいつしかいない！

「言ってごらん？」

「ズバリ、俺の姉貴だ！」

みんなは驚いた顔で俺を見ている。

「ち、違うよー」

「あれ？だって昨日俺と気まづくなるって…」

なーんだ違うのか、という顔の華。

そのとき、月海さんは直也の側まで行きこそっと耳打ちした。

すると、直也の顔が真っ青になっていった。

「ど、どうしてわかったの…？」

なんと、どうやら月海さんは当てたらしい。沙紀ちゃんですら分からなかったのを当てるとは

…さすがは月海さんといったところか。

「今まで少し、観点を間違えていたみたい」

「だ、誰？」

俺は月海さんに迫った。直也は不安そうな顔で月海さんを見ている…

「それはちょっと言えないわ」

「えー、なんでよ彩目ちゃん、せつかく当てたのにー」
華が愚痴っている。

「さ、違う話をしましょ」

さらりと流す月海さん。直也は心底ホツとした顔をしている…

俺は腑に落ちなかったけど、もう少し酔えば直也は無理でも月海さんから聞きだせるだろう。
そう思い、ワインをグラスに注いだ。

夜はまだ長い…

2時間経過。直也はダウンした。テーブルにもたれてぐっすり眠っている。

華は顔が赤くなっている。すっかり出来上がっているようだ。

しかし、たちが悪いのは直也のズボンが脱がそうしているところだ。月海さんは照れで顔を赤らめている。

「おいおい、やめとけよ華」

「うっさいなー、いっつもなよなよしてんだからこいつ、ついてるもんついてるかたしかめてやるんらからー！」

それつが上手く廻っていないが、何を言っているかはわかった。
が、それはちょっとまずいだろ…

「うーん、うわ、や、やめて…」

直也が起きた。もうすでにトランクスが見えている。直也は急いでズボンをはいた。

「な、なにすんの…グー…」

直也はもう限界らしい。起きたと思えばすぐ眠ってしまった。

月海さんは直也に毛布をかぶせてやった。華ももう眠たそうだ。

「華、もう眠たいんじゃない？」

「あー、らいじょうぶ…」

「無理せずに横になれば？」

「うーん、ちよつと寝る。20分たったら起こして…」

華はそう言って床で眠ってしまった。月海さんが毛布をかぶせる。

「深山君は大丈夫？」

「うん、まだまだいけるよ。月海さん、酒強いね」

「それでもないわ。立ったらふらふらするもの」

そうだ、直也の事…聞くなら、今だ。

「あのさ、直也の好きな奴のことなんだけど…」

「どうしてそんなに知りたがるの？」

俺は一瞬悩んだが、隠さずに言った。

「沙紀ちゃんが聞きたがってる」

「…やっぱり？」

意外な答えだ。月海さんは沙紀ちゃんが直也の事が気になっていることに気付いていたのか？月海さんはテーブルに頬杖をつき、外を眺めている。

「あなたは、それを聞いて桜川君を軽蔑したりしない？」

俺は不思議に思ったがすぐに答えた。

「もちろんだよ。大切な友達だから」

月海さんはゆっくり、こちらをまっすぐ見据えた。しばしの沈黙…。そして、月海さんが口を開いた。

「桜川君は、あなたの事が好きなの」

「…え？」

「彼は、同性愛者なのよ」

俺は月海さんが何を言ったのか、一瞬理解できなかった。

そのぐらいの衝撃を受けた。

テーブルにもたれかかって眠る直也を見た。そんな、まさか…

「向こうはあなたを恋愛の対象で見つめていたのよ。あなたはそれでも彼と友達？」

俺は月海さんを見て、はつきり答えた。

「ああ。親友だよ。」

「親友……」

月海さんは俺を少し意外そうな顔で見ている。

「だって一番苦しいのは直也だ。叶わぬ恋と承知でも、それを信じて俺にずっとついてきてくれた」

再び、俺は直也を見た。まるで女の子のような寝顔が余計に俺の胸を締め付けた。

「……優しいのね。深山君」

「……でも、ちよつとショックかな。風にあたつてくるよ」

俺はベランダに出た。

夜風が俺の頬を優しくなでた。

空には、満月が、大きな満月が夜空に浮かんでいる。周りには幾つもの星が輝いている。

そして星は、滲んだ。

……正しくは、俺の目から今にも涙が溢れそうになっていた……

叶うことは無い恋を今までたった一人で抱え込んでいた直也に対して、それに振り向いてやれない俺ができる事は涙を流すことだけだった。

街を見た。空は闇だというのにまだ光を絶やさず、いずれは朝が暖かく迎えてくれるのだろう。でも、直也の恋には朝はきつと来ない……

「泣いてるの？」

いつのまにか、月海さんは俺のすぐ隣にいた。

彼女は夜景から目を離さずにいる。

：月海さんに見られたら恥ずかしいので、俺は涙をぬぐった。

「ちよつと…直也が可哀想で…」

俺も夜景から目を離さずに言った。

しばらく、沈黙が流れた…

「愛って辛いものね」

月海さんが呟いた。

「一方通行じゃ成り立たないもの」

「確かに…」

俺がそう言った瞬間だった。

彼女は俺の頬に両手を添え…

そっと唇を重ねてきた。

一瞬何が起こったのかすら分からなかった俺はやがて落ち着き、目を閉じて彼女の肩をそっと抱いた。触れ合う唇が温かい。

俺は少し強く彼女を抱いた。

しばらくして唇を離し、俺たちはまた夜の空を眺めた。

心臓が割れそうなくらい激しく脈打っている。

月海さんとキスをした…

「私の愛は…一方通行かしら？」

彼女の声は落ち着いていた。

俺は唾を飲み込み、必死に何か気の効いた台詞はないか探した。

「…一方通行なわけないよ」

緊張のあまり、あまり言い台詞は出てこなかった。

でも、これで十分想いは通い合った。

俺はついに月海さんの心に触れる事ができた。

月海さんは相変わらず空を、星を、月を眺めている。

…でも何故か少し、ほんの少し悲しそうな顔をしている…

「…お酒って便利ね」

「はは…」

「さ、風邪をひくわ。部屋に戻りましょう」

「うん…」

俺たちは部屋に戻った。直也はテーブルで眠っている。華も床で眠っている…はずだった。

「夏目さん…」

月海さんが呟いた。

華はテーブルに座って俺たちの方に振り向かずじっと壁を見つめていた。

酔いは覚めているようだ。

これにはさすがの月海さんも驚きを隠せない。

「華…起きてたのか？」

「私だって…」

華は眠る直也の乱れた髪をそっと掻き分けた。直也のやさらかな寝顔がはっきり見える。華は小さなため息を一つついた。

「…私も一方通行だったよ直也君」

華の顔は悲しそうだったが、どこかにあきらめの色が見えた。

「…ごめんさい」

「別に、謝ることじゃないよ…彩目ちゃん。じゃ、こんどこそ本当にアタシ寝るから。寝るからって二人きりで変な事しないでよ。オヤスミ」

華はそういってテーブルにもたれかかるようにして、そっと目をつむった。

月海さんは悲しそうな顔をして奥の部屋に入っていった。

俺は華にそっと毛布をかけてやった。

すると、華の目から一筋の涙がこぼれた…

「バカ…余計なことしないでよ」

「ごめん…」

俺はしばらくテーブルの椅子に座って、じつと外の月を眺めていた。

「京介、幸せだね」

華が呟いた。俺は何も言わずに華の方を見る。するとまっすぐ目が合った。

「みんなあなたの事が好きなんだよ」

そう言われて俺は気付いた。華、直也、そして月海さん…。

俺は初めて人に好かれるのがこんなに辛いものなのか…そう、思った。

「もう…眠れないから奥の部屋に行きなさいよ」

華は笑顔でそう俺に言ってくれた。

「ああ…」

俺は月海さんの入っていった部屋に向かった。

華…直也…ごめん。

俺は月海さんが好きなんだ。

月海さんは机に向かって何かを書いている。

「何、それ？」

「日記。もう少し待ってて」

待っている？

待っているということは俺に見せてくれるのか？

俺は黙って床に座り、月海さんの日記を書く姿を眺めていた。

やがて月海さんは手を止めて、日記を閉じた。そして、そつと俺の方に振り返った。

「見たい？」

「え…？うん。いつから書いているの？」

「御神高校に入学する前の日から」

「へー…。それを俺に見せてくれるの？」

月海さんは俺の前まで来て、正座の形で座った。

そして、日記をそつと俺の前に差し出した。

「これを読めば私の全てとこれからがわかると思う」

「月海さんの全て…？」

「いつか深山君みたいな人に見せようと綴った…私の真実と罪と…私自身の苦悩の日記」

「真実と罪と苦悩…」

「深山君の：私を見る目が変わってしまいかもしれない」

「：でも、読んで欲しいんでしょ？」

「：誰かが読まなければいけないの」

俺の答えは決まっていた。

「読むよ。それで月海さんは救われるんだろ？」

「…」

月海さんは俯いたまま何も答えなかった：

「じゃ：読むね？」

ノートの表紙にはただ、日記とだけ書かれている。

俺は表紙に端に手をかけた。

月海さんが微かに震えているのがわかった。

俺は妙な不安に駆られながらも：

ゆっくり表紙をめくった

第4章く日記く

前書

私の罪は、私が生まれた瞬間から始まった。

何故なら、私の母は私の出産で命を落としてしまったから…

父は母を心の底から愛していた。

そして…父は私を憎んだ。

母を殺した私を心の底から憎んだ。

そんな父が私にとても似合う名前を付けてくれた。

月海 殺（つきみ あやめ）

それが私の名前。

私と父はずっと二人で暮らしていた。でも、父は滅多に私と口を利かない。

親の愛…人の愛を知らずに育った私は、幼い頃から無口で、誰とも喋らず、そして人を愛す事ができなくなっていた。

でも、その時はまだ父も私を「彩目」と呼んでいてくれたはずだ。

…父が私を「殺」で呼ぶようになったのは私が中一の時だった。

「お父さん、どうして私にはお母さんがいないの？」

物心がついた頃から、ずっと疑問に思っていたことだった。

悩みに悩んだ挙句、私は勇気を出して聞いた。

でも…聞くんじゃなかった。

父の目は私を貫くように睨んだ。

「…アヤメ、お前が…お前が殺したんだ！」

父はそのあと私の顔に何度も平手をぶつけた。

私は恐怖と痛みでうずくまっても、無理矢理手でこじ開けられ、何度も何度も私は顔を打たれた。

「ごめんなさい…ごめんなさい…！」

何度も何度も打たれ…

私は何度も何度も謝った。

そして気が付けば、私は病院にいた。

頬が青く変色し、口の中はズタズタに切れ、左耳の鼓膜まで破れていた。

「ごめんよ、アヤメ」

父の顔はとても温かく、穏やかだった。

無口で無表情で、久しぶりに見た父の笑み…

しかし、それに対し安らぎなんかをおぼえるはずが無い。

むしろ、心の底から恐怖で震えた。

私はその日以来、人を信じる事ができなくなっていた。

人を信じようとすると、あの穏やかな父の顔が浮かぶ…

退院した私を父は迎えに来てくれた。

そのときも父は笑顔だった。

ひよっとするとそれを見た私は心のどこかで父を信じていたのかもしれない。

「（もう、きっとお父さんは私を打たない。あれっきりだ…）」

しかし、地獄はそれからだった。

家に帰った私は自分の部屋の前でしばらく立ち尽くした。

ドアには真っ赤なインクで「殺の部屋」と書いてある。

「お父さん…これ…」

「お前の部屋だ、殺」

「月海 殺」の誕生だった。

次の日の朝、私は目覚めてしばらくベッドに座っていた。すると父がドアを開き、

「殺、ご飯」

と言って私の顔を嬉しそうに見つめている。

心底気味が悪かった。

…リビングのテーブルに置かれた朝食を見て、私は絶句した。

「どうした？殺、座れ」

私は何かの見間違いかと思い、椅子に座ってもう一度自分の皿を見た。皿にはパンが。そして、そのパンには真っ赤なジャムが塗られていた。

この臭いは…

血だ。

血のジャムだ。

「うう…!!」

私は吐きそうになるのをこらえて両手で口を抑えた。

「どうした殺、早く食べないと学校に遅れるぞ」

「どうして…どうしてこんなことするの！」

「気にいらなかったか殺？血が好きだろう？お前はお母さんの血をすすって生まれた悪魔だろ。それともそこら辺の猫の血じゃ満足できないか？」

私はトイレに駆け込み、吐いた。

同時に涙が溢れてきた。

どうして…どうしてこんなことをするのお父さん…

私は父を憎んだ。

それから毎日、私は父の嫌がらせを受けた。

私が何を聞いても無視。

呼ばれてすぐ返事をしなければ殴られた。

意味も無く殴られることもしばしばあった。

夜中突然私の部屋に来て私に罵声を浴びせたり水をかけたり…

ベッドに猫の死体。

壁に血糊で殺、殺、殺…

他にも思い出したくないことが山ほどあった。

自分でも分かる。

私は気が変になってきていた。

そのせいもあり、私は元々友達があまりいなかったため、学校ではたった一人になってしまった。

このことを相談する友達もいない…

誰も助けてくれない…

何度か自殺を考えたが、それもできなかった。

父に敗北するのが嫌だったのか…

それともただ、死ぬ勇気が無かったのか。

そして私はいつしか父に殺意を覚えていた。

そして中3の時。

学校から帰ってきた私は部屋に閉じこもってずっと音楽を聴いていた。

母が私に残してくれたジャズのCDだ。

私が安らぎを覚えるのはそのCDを聞いている瞬間だけだった。

…しかしその日、父が突然部屋を開けてこう言った

「殺：お母さんに似てきたな」

父の目は今までと違う：明らかに。あの目は：

そう、女を見る目だった。

もう耐えられなかった。

父は私を辱めるつもりでいる。

無くした母の代わりを私で：

私は震えた。憎しみと恐怖と悲しみと絶望と：

涙はとめどなく溢れ、父に犯されるところを想像し、何度も絶望した。

死のう。

ただでは死なない。

あいつも道づれにする。

私は灯油を家中に撒いた。

全て：

全て灰にしてやる：

「殺！何してる！」

父が異変に気付き、部屋から出てきた。

私はバケツに別に入れておいた灯油を父に思いっきり浴びせた。

父は慌てて逃げようとしたが、灯油で滑って尻餅をついた。

私は無様な父にありったけの憎しみを込め、思いっきりバケツをぶつけた。

バケツは父の顔面にあたり、額には血が滲んでいる。

私はライターに火を灯した。

父はどんな気分だっただろう？

悲しみ？怒り？憎悪？恐怖？絶望？混乱？

私は今までその全てを抱えてきた。

父にもその欠片だけでも味あわせる事ができただろう。

何と言えいいのか難しいけど……

そう、私は絶望の中で最高の気分を味わった。

そして、全てを終わらせるべく……

ライターを父に投げつけた。

「死ぬ……」

刹那、炎は燃え上り、一気に家中真っ赤に染めた。

「悪魔めええええ！」

悪魔……

そうね。私は悪魔。

父の焼け死ぬ姿を残酷な笑みで見下ろす私。

悪魔以外の何者でもない。

私はまだ火の手の回っていない自分の部屋に閉じこもり、天井を眺めていた。

煙のせいか、頭がぼんやりする…。

どうやら焼け死ぬ前に一酸化中毒で死ぬようだ。

神様は優しいのね。

「さようなら」

私は自分自身に別れを告げた。

しかし、気が付けば病院だった。

警察は父が誤って灯油をこぼし、それがタバコか何かに引火したと言う調査の結果を出した。親戚が全くいない私には、皮肉にも父の死によりおりた保健と財産が丸々入ってきた。

呪われたお金。

呪われたお金で借りたこの呪われたマンション。

呪われた食器、呪われた家具、呪われたCD、呪われたギター、呪われた本…

呪われた私。

呪われた生活の始まり…

神様は残酷ね。

何の夢も希望も無い私は今住んでいるマンションから割と近くにある御神高校に受験した。御神高校から私の中学までは遠く、学区が違うから同じ中学から誰も受験しないのも理由の一つ。…そして、御神高校に合格した。

明日は入学式。

死ぬのはいつでも死ねる。

でも、一人で死ぬのは怖かった。

私の真実と罪と苦悩を誰かに知ってもらい、そして死にたい。

それが唯一、私が生きた証になる…。

誰か、私を知ってください。

4 / 10 月

今日は御神高校入学式。掲示板で私の名前を誰かが指を刺し、もう一人が読み上げていた。一瞬、同じ中学の者かと思いきったけど、全然知らない顔だった。

指を差していたのは室井 将。だらしない服装と茶髪。見た目だけで判断するのは良くない事だけど、こういう人は嫌い。

名前を読み上げたのは深山 京介。室井君とは対照的に、中性的な顔立ちから不思議な魅力を感じた。

4 / 1 1 火

今日は上級生との対面式が行われた。教室で室井君がいやらしい目つきをこっちに向けては深山君に何かを言っている。おそらく私に気があるのだろう。でも私は室井君が嫌い。

4 / 1 2 水

夏目 華。彼女が私に一番最初に話し掛けてきた生徒だった。席が前後なので「生徒手帳見せてくれる?」と私に頼んできた。どうして生徒手帳なんか…と思ったけど、渋々見せてあげた。すると「ありがとう、写真可愛く写ってるね」だって。

彼女、友達を沢山作りたがるタイプかしら?

私とは正反対。

4 / 1 3 木

今日は学校見学があった。

4 / 1 4 金

風呂に入っている時、父が焼け死ぬ所を思い出した。

どろどろに溶けた皮膚、人が焼ける異臭、「悪魔」と叫ぶ声…。

私は愉快で声をあげて笑った。

いえ：嘘ね。無理して、意地になって笑ったんだと思う。

でも、気分が悪くなって風呂場で吐きそうになった。

4 / 15 土

学校から帰ってギターを弾いていると、1弦が切れたので不愉快だった。

それでも1弦があるように思い込んで強く真似をした。

：自分がバカに思えてきたのでやめた。

4 / 16 日

ボーっとしてたらグラスが手から滑ってコーラを零してしまった。

4 / 17 月

学校ではずっと空を眺めている。

鳥を眼力で落とせるかやってみただけど無理だった。

4 / 18 火

部活に入るか悩んでいたが、人と話をするのが嫌だったのでやめた。

4 / 19 水

今日体育の前の時間に名前の知らない女子に「なにちゆう？」と聞かれたが意味がわからないので無視した。その後、彼女は私の陰口を叩いていた。

別にそんなのは慣れっただけど：今思えばどこの中学かを聞いていたのかもしれない。

せめて何か答えるべきだったかも。

ピカチユウは古いかしら。

4 / 2 0 木

女子が私を避けるようになっていた。昨日の事のせいだろうか？

でも、変に話し掛けられるよりはずっと気が楽だと思った。

4 / 2 1 金

変な色に濁ったプールを眺めていると、父が嫌がらせて私の朝食に出したカビたパンを思い出し、とても気分が悪かった。

4 / 2 2 土

今日は休み。暇なので街に下りて服を何着か買った。ついでにギターの弦も買った。

街に下りたのは初めてだったけど、悪いところじゃないと思う。

4 / 2 3 日

道路で猫の死体を見つけて思いっきり吐きそうになった。

父の嫌がらせによるトラウマだろう。

しばらくくまなくまっていたら、通りがかった人が「大丈夫ですか？」と聞いてきたが：

恥ずかしかかったので走って逃げた。

4 / 2 4 月

授業中、後ろの席の女の子から小さく切った消しゴムを投げられた。腹が立ったので数秒睨ん

だら泣きそうな顔で目をそらした。いい気味。

4 / 25 火

体育の授業で体力テストがあった。

夏目さんはほとんどの種目でトップに立っていた。すごい。

4 / 26 水

登校時、深山君が女の人2人と歩いていると思ったら…

一人は夏目さん、もう一人は女顔だけど男の人だった。

彼には失礼な事を考えてしまった。

4 / 27 木

弁当を忘れたので食堂で蕎麦を食べた。

なかなか口にあっただし、安いので明日から食堂にしよう。

4 / 28 金

食堂で深山君、室井君、明石君、佐藤君がこっちをちらちら見ていた。

うっとおしいと思ったけど、「絶対俺の物にする！」と室井君が叫んでいたの、別に疎まれてるわけではないみたい。

どちらでもいいけど。

4 / 29 土

今日はみどりの日。昨日おかしな夢を見た。

父に出された血のジャムパンを何枚も何枚もたいらげる夢だ。

血の臭みで吐いては食べ、吐いては食べ……。

思い出したら寒気がした。

4 / 30 日

最悪な夢を見た。

最低の悪夢：父に犯される夢だ。

私は夜中に目を覚まし、一人でずっと泣いていた。

寂しいのでテレビを付けて見るとAV紹介の番組で女の人が犯されていたので、また泣いた。

5 / 1 月

昨日は夢を見なかった。それと、席替えをした。

また私の陰口を誰かが叩いていたので、私はうんざりしている。

すると、深山君が「竹藤さん、そういうのは良くないって」と止めていた。

誰も信じられない私だけど、彼の事をほんの少し信じられるかもしれない。

5 / 2 火

夢に深山君が出てきた。私の家のインターホンを何度も鳴らしているので、ドアを開けてなんの用か訊ねてみた。すると「俺、君に呼ばれたんだよ？」と言っている。いたずらにしては達が悪かったのでドアを閉めた。

おかしな夢。

5 / 3 水

憲法記念日で学校は休み。

街の楽器店に行つてギターを見てみると、なんと、となりで深山君が女顔の友達とギターを見ていたので驚いた。向こうがこっちにペコリと頭を下げたので、ほんの少しだけ私も頭を下げた。そのあと「直也、ベースはあっちだ」と言つたので、女顔の友達は直也君と言う事がわかつた。

家に帰つて名簿で名前を捜すと、隣のクラスの桜川 直也という生徒だという事もわかつた。

…ちなみにあの二人は並ぶとカップルみたいに見えた。

5 / 4 木

…自分が恥ずかしい。

深山君に犯される夢を見た。深山君はどこまで私に付きまどつてくるのか…。凶々しい。少し彼が嫌いになつた。

5 / 5 金

子供の日なので今日も休み。さつき、洗面所のたまった水を覗き込むと父が微笑む顔が見えた。今も恐怖でうずくまつている。でも日記だけは書かないと…

5 / 6 土

沼地に首まで浸かつた父が私をじつと見ている夢を見た。恐怖で目を覚ましたら、一瞬壁に父の顔を見た気がした。

幻覚？精神分裂病？私の頭はおかしくなってきたいるのだろうか？

5 / 7 日

今日は休みなのでずっと家でギターを弾いていた。

そして、夜。

一人で晩御飯を食べていたら急に正体不明の不安に襲われたので、テレビを大音量でつけた。すると、ドアの向こうから「殺！殺エー！焼け死ぬ！助けてくれ！」という父の叫び声が聞こえた気がした。

私は恐怖でずっと耳をふさいでいた。

それでも叫び声は聞こえてきた。

私が助けて欲しい。

5 / 8 月

熱が出ているので学校を休んだ。38度8分。かなり気分が悪い。

昼に玄関のドアが開いた気がしたが、行ってみるとドアはしまったままだった。

そして自分の部屋に戻ると：

なんと、ドアのそばに父が立っていた。

私は思いつきり悲鳴をあげて倒れてしまった。

嘘よ、死んだはず！

ごめんなさいゴメンナサイゴメンナサイ…

私はうづくまり、心の中で何度も何度もゴメンナサイを連呼した。

そして恐る恐る顔をあげてよく見ると：

ただの洋服ダンスだった。

私は安心したと同時に悲しくなってきた。

見間違いにどうしてそこまで脅えたのだろうか：

熱だから？ 疲れているから？ 幻覚を見たの？

それともやつぱり：呪い？

5 / 9 火

今日も熱が少しあったので、学校を休んだ。

昼寝しているとき嫌な夢を見た。

父が私を初めて殴った日の夢だ。

目が覚めて鏡をみると窓に父の顔があったので振り返って見てみると誰もいなかった。もう一

度鏡を覗き込んでもやつぱり誰もいなかった。

怖い。

5 / 10 水

今日は風邪をひいていないが、学校を休んだ。とても行く気力が無い。

最近は何間にも壁や天井や水面に父の顔を見たり、気配を感じたりする。

音楽を聴いていると遠くから父の呼び声が聞こえる。

毎日毎日父の呪いが私を襲う…。

もう嫌。

死にたい。

5 / 11 木

今日は学校にいった。夏目さんが「3日も休んでたね、大丈夫？」と聞いてきたので私は少しうなずいた。

少し後、後ろで「華、あの子に近づかない方がいいよ」といつてるのが聞こえた。そう、近づかない方がいい。

呪われるわよ。

5 / 12 金

気が付けば学校で居眠りをしていた。相当疲れているみたい。

しかも、夢まで見た。深山君の夢だ。内容はあまり思い出せない。

私は後ろ…深山君の方を振り返った。すると目が合ったので、妙に恥ずかしさを感じてしまった。

5 / 13 土

今日の晩、テレビをみていたら急にまた父の声が聞こえた。本当に微かなので耳をよーく澄ましてみると「熱い熱い熱い熱い…」と言っている。

私は怖くなって、耳をふさいだ。

それでも聞こえてくる。

どうして？

どうして死んでからも私を苦しめるの？

確かにお母さんの事は謝ってすむ事じゃない。

でも、そんなつもりは無かったのよ！

むしろ私だつて悲しいわ！

誰が好き好んで自分の母親を殺して産まれてくるのよ！

「熱い熱い熱い熱い……」

やはり、一緒に焼け死んでいればよかった。

地獄であいつとゆっくり話をしよう。

だから、仕方なく果物ナイフで手首を切った。

血がテーブルに滴る。

もういい。

今日の日記は遺書。

眠たくなってきた。

さようなら。

5 / 14 日

目が覚めると、手首の血は固まっていた。

どうやら助かったらしい。

傷口は開いていたが2、3ミリ程度だろうか。

私は少しホツとしたけど少し残念だった。

昨日死んでいたら楽だっただろう。

それにしても気分が悪い。

5 / 15 月

今日は学校を休んだ。血が減っているせいか気分が悪い。

栄養を取るためにかくたくさん食べた。

：太らないか少し心配。

5 / 16 火

まだ少し気分が悪いけど家にいるとロクな事が無いので学校に行った。

5 / 17 水

今日は面白い日だった。食堂で蕎麦を食べていたら、明石君（深山君達に金魚の糞のようにへばりついている）が「隣いっすか？」と馴れ馴れしく聞いてきたけど、ちょうど食べ終わるところなので彼が席につくと同時に私は席を立った。

彼は別に何も言わなかったが、カレーをあまり美味しそうに食べていなかった。

それと、5時間目の休み時間佐藤君が私の：尻めがけに転んできた。

周りからの視線と佐藤君に対する怒りで私は佐藤君の頭を思いつき蹴り飛ばしてしまった。

すると、佐藤君が泣いた。今思い出すと笑いがこみ上げてきた。

5 / 18 木

今日は腹が立った。

私の嫌いな室井君が私の机にラブレターを入れていた。内容はこんな感じだった。

「今日一緒にカラオケ行きませんか？よかったらホテルいこーよ！そんだけ可愛かったら初めてじゃないでしょ？前から気になってたんだよ僕。返事くださいねー」

：彼は頭が悪いのだろうか？

頭にきたので私は窓からその手紙を放り投げた。すると見事、コンテナに入ったので少し嬉しかった。でも、室井君はあわてて探しに行っていた。

馬鹿ね。

5 / 19 金

室井君達にニヤニヤ見られた。うっとおしい。

深山君は必死にやめるように言っていたが、あきらめて夏目さんと話をしていた。

ちなみにオリエンテーション合宿は夏目さん達のグループに入れてもらった。

：あと席替えしたら、隣の席に深山君が来た。

まあ全然知らない人や嫌いな人が来るよりはずっと良かった。

5 / 20 土

夏目さんと深山君が付き合っているという噂がクラスに広まった。

私は何故か、一日不愉快だった。

5 / 21 日

今日パソコンを買った。インターネットもつないだ。

早速いろんなホームページを見たけど、一番印象に残ったのは焼死体画像を見た時だ。どうしてそんなものを私は探していたんだろう？

何かが変わるとでも思ったのだろうか？

父を思い出してトイレで嫌になるほど吐いた。

私は馬鹿だ。

5 / 22 月

学校では深山君と夏目さんが気まずいのか、全然話をしていない。

それでも彼は噂を立てた明石君達と一緒に行動している。

おかしなものね。

ちなみに今日はインターネットをしなかった。パソコンを見ただけで吐き気がする。

5 / 23 火

学校から帰ってきてエレベーターに誰か一緒に乗ったと思ったたら、誰も乗っていないかった。でも、ガラスを見ると父の顔があったので妙に納得してしまった…。

もちろん、慣れたんじゃない。それとは別。

不安で不安で仕方が無かった。

だからもう…やめて。

5 / 24 水

今日も父の呪いに悩まされた。

学校に行ったら、ずっと視界の端に誰かの気配がしていた。

そっちを見ても何も無いけど、気配を感じる。怖かった。

あと、今日は久しぶりにパソコンをインターネットにつないだ。今日は普通のサイトを見た。

5 / 25 木

それにしても毎日毎日、父は飽きずに私を見ている。

大人しくあの世で暮らして欲しい。

5 / 29 月

日記をサボってしまった。

あまりに呪われた毎日にうんざりした。これからは特別な日にしか日記をつけない。

…今日はちなみに月食。

不思議な空を眺めていると…今日だけは何の不安も感じなかった。

今もすごくいい気分。

6 / 3 金

夏目さんが事故で入院した。

深山君の表情は重い陰気を帯びている。

彼は夏目さんを愛しているのだろうか？
だったら可哀想だな、と思った。

6 / 12 月

明日から合宿。誰かに見られるのが怖いので、日記を持っていくか悩んでいる。

6 / 13 火

結局日記は持っていくことにした。

それと：今日初めて深山君が私に喋りかけてきた。

おまけに、私に20円をなんの気兼ねも無しにくれた。

そのとき、私は学校に通いだして初めて：

笑顔を他人に見せた。

確かに見せたのは笑顔だったと思う。

：私は彼を気にしているのかもしれない。

ひよっとすると：

彼は私が探していた、私の死を見届けるべき人なのかもしれない。

今思うと、「ありがとう」ぐらい言えばよかった。

明日、お礼にコーラを深山君に渡すついでに何か話をしよう。

6 / 14 水

私は一人では無くなった。

私には深山君がいる。

私は生まれて初めて人を信じた。

桜川君と藤森さんとも友達になった。

同じ班の国府田さんが「あなた、深山君と今日話してたでしょ」と聞いてきた。

私はつい気分が良くて「羨ましい？」と聞いた。すると大きな声で「あつたりまえよー！」と言われて、うるさかった。

でも：そういうのも何か楽しい気がした。

そこまでは良かった。

：夜、また父の私を呼ぶ声。

うるさかった。せつかくのいい気分が台無し。

いえ、台無しなんてものじゃない。

人を信じる事ができても呪いは消えなかった事に：

私は絶望した。

6 / 15 木

今日は合宿の帰りに深山君に家まで送ってもらった。

実は：そのとき、ついでに家にながってもらった。

他人をこの家に入れたのはもちろん初めてだった。

深山君はとても行儀が良かったが、終始そわそわしていた。

そんなに緊張しなくていいのに。

6 / 16 金

深山君と携帯を買いに行った。

買った直後なのに電話がかかってきて、誰かと思えば……

目の前の深山君だった。

仕方なく電話をとって「もしもし」って言ったら笑われた。

少しムツとした。

7 / 2 日

今日横断歩道で青信号を待っていたら、後ろから父が走ってきたような気がしたので、横断歩道を走って逃げようとしたら赤信号だったので車に轢かれそうになった。

まるで父は私を殺す気だったみたい。

7 / 3 月

深山君、夏目さんといっしょに私の家で期末テストに向けて勉強した。藤森さんと桜川君はテスト1週間前は外出禁止なので来なかった。

7 / 10 月

テストが終了した。最近気付いたけど、藤森さんは桜川君を好きなのかも知れない。

7 / 11 火

今日からテスト休み。

私は藤森さんとCDショップに行き、彼女が選んでくれたジャズ系のCDを数枚買った。マンハッタン・ジャズ・クインテット：渋いです。

相変わらず、藤森さんは趣味がいい。

今まで母の残してくれたCDばかり聴いていたので、音楽の知識には乏しい私。これからも彼女に色々教えてもらおう。

7/16 日

夏目さんが私のことを「彩目ちゃん」と呼ぶようになった。

アヤメ：アヤメ…。

嫌な事を思い出したけど、やめろとも言えない。

辛いけど我慢した。

8/2 水

今日ほどにかく暑かった。憂鬱な気分。

そんなのは良かった。扇風機が癒してくれるから。

問題は…

…夜中に電気を消したとき、数秒間父と目が合った。はっきりと。

幻覚にしては長かった。

その後、恐ろしくてずっと布団でうずくまっていた。

どうして私は目を逸らさなかったの？

まだ父と戦うの？

…そうね。あの人に負けるわけにはいかない。

私が生きているのはその為でもあるのだから。

8 / 5 土

今日は一人で色々考えた。

私は父の呪縛から開放されたわけではない。

でも深山君が私を信じてくれている。

こんな私に本当にいい友達も作ってくれた。

夏目さんは私に一番積極的に人生の楽しさを教えてくれる。

藤森さんは音楽を通じて私を勇気づけてくれる。

直哉君は深山君に負けなくらいの優しさを私に与えてくれる。

みんな良い人達で、信じられる人ばかり。

もう少し生きる希望が湧いてきた。

そして気付いた。

…私は深山君を愛している。

8 / 6 日

深山君を誘って街を歩いた。しかもたった二人で。

私から誘ったのは初めてだ。

二人で別に行き先も決めず、街をうろつく。

でも楽しかった。

時にはこんな日もいいかもしれない。

これも生きる事かしら。

…それと昨日考えた事を思い出し、少し照れくさかった。

これが恋かな？

私には無縁だと思っていたけど…

こんないい日は久しぶり。

…なのに！

また。

夜中…家に誰かが入ってきたような気がしたので、驚いて目を覚ました私は家中を探したが…

誰の姿もなかった。

そのとき気付いた。…また父の呪いだ。

毎日毎日いいかげんうんざりしてきた。

せっかくもう少し生きる希望が湧いたのに、急にまた死にたくなってきた。

まるでせっかく上った階段から転げ落ちたような気分だった。階段から落ちたら体は傷だらけ。楽しかった分、前よりずっと：

絶望した。

8 / 10 木

深山君達と海に行った。

彼女：藤森さんは妙に乗り気じゃないなと思ったら、カナヅチだった。

桜川君は優しい事に彼女に泳ぎ方を教えていたが、やっぱりあまり泳げていなかった。

：それと、最近上の階の人がうるさい。

8 / 14 月

私は一人で街をぶらついた。すると、傷だらけの室井君が一人で歩いていた。

私は気付かないふりをして横を素通りした。

どうしたんだろう？

それと、上の階の人がうるさいと思ったら、504には誰も住んでいなかった。

でも暴れる足音や叫び声が聞こえる。

あ、そうか。

また父だ。

眠れない。もう耐えられない。

毎日毎日、私は限界。

私は鏡を覗き込んだ。

…誰？このやつれた人。

やっぱり…私？

こんな事がこれからもずっと続くの？

だとしたら…

もう深山君にも私を救うことはできない。

きつと私を救ってくれるのは…

死。

死だけが私を暖かく包み込んでくれるはず…

8 / 15 火

今日で私の日記は終わり。

深山君、見てくれた？

私の真実を。

私の罪を。

私の苦悩を。

私の全てを。

私はこの運命からはもはや逃れられない。

誰にもわからない苦しみを毎晩感じてきた。

そして、これからも感じるのだと思う。

あなたと口づけを交わした時も、父はあなたの後ろで私を睨んでいた。

怖かった。その時だけじゃない。

今までずっと怖かった。

もしあなたや他のみんながいなかったら私はとっくに死んでいた。

実際、死のうと思った事が何度もあった。

よくここまでもつたと自分でも思う。

あなたのおかげよ。

…ありがとう。

でも、明日から私はあなたの心に生き続ける事になる…

最後の最後でいい思い出をありがとう。

嬉しくて嬉しくて涙を堪えています。

ここまで生きる事ができた事…

私に勇気を与えてくれた事…

私に信じる心を教えてくれた事…

私と唇の温もりを分かち合ってくれた事…

私に愛というものを教えてくれた事…！

あなたにもらった全て…

全て、私の魂にとって大切な宝物です。

本当にありがとう…

そして…本当にごめんなさい。

でもあなたは私がいなくても生きていきます。

あなたは私なんかよりずっと強い。

私なんかよりずっと強い仲間達にも囲まれている。

だから、胸が痛くても

心が辛くて壊れそうでも

真実がわからなくとも…

勇気を出して。

あなたは羽ばたいて行ける。

この広い広い大空を、

まだまだ羽ばたいて行ける…

扉はあなたが選び、

そしてあなたが思い切り開いてください。

そこに幸せが待っています。

間違っても私の様にならないで…

勇気をだしてください。

最後に…

今日は遠まわしな言い方でごめんなさい。

改めて言い直します。

でも結局、文字でごめんなさい。

愛しています。

本当に愛しています。

さようなら

エピソード くさようならく

「月海さん!?!」

俺は日記から顔をあげて叫んだ。

いない。

さっきまで部屋にいたはずの月海さんがいない。

あまりに…そう、あまりに衝撃的な日記の内容にすっかり気を奪われていた俺は、月海さんが

部屋から出て行ったことに全く気付かなかった。

なんて間抜けなんだ!

俺が急いで部屋から出たそのとき…

バタン!

玄関のドアが閉まる音が聞こえた!

「待ってくれ!」

俺は夢中で玄関に向かった。

廊下に出ると、誰かが階段を駆け上がる音が聞こえた。

「月海さん!」

俺は階段を必死に登った。

月海さんを出産したことにより死んだ彼女の母。

「月海 殺」を憎む父。

虐待の日々…

そして、心中…

生き残った月海さんを待っていたのは、父に呪われた日々…

俺との出会い…そして俺が日記を…

最後の自殺をほのめかす文章

そして月海さんの「さようなら」

あまりにも異常な日記の内容が、月海さんの絶望の半生が、一気に頭を駆け巡った。でも、俺には混乱する暇すらない。

とにかく不安だった。

たのむ、死なないでくれ…!

俺が強い人間だって？冗談じゃない!

君が死んだら…俺は…

そして、屋上に出た。

大きな満月を背に月海さんが立っていた。

夜風が長い髪を綺麗になびかせている。

月海さんはこつちを冷たい目で見ている。

そして、その右手には1本のナイフが：

俺は背筋が凍る思いを感じた。

「月海さん！」

「深山君：日記を最後まで読んだでしょ？」

「ああ：読んだよ」

「だったら、お願い。もう私を：この呪縛から開放させて：」

「君が死ぬところを黙って見てなんかいられない！」

「お願い。私を笑顔で見送って：」

俺は首を横に振った。

「できるわけ無いだろう！」

「私は、生まれた時から死ぬべきだったのよ：それにもう、耐えられない。水面を見れば父が私をみている。鏡にも壁にも天井にも床にも空気にも何処にも：！夜中に目を覚ませば父が私を見ている。あなたとキスをしても私を見ていた。もうたくさん！あの時、あの人と一緒に焼け死んでいればよかった：！」

「でも君は生き残った！父親は死んで当然だった！」

「違うわ、私は父の最愛の人を殺めて生まれたのよ！あの人を憎むのは当然……」

「だからって父親のあんな事が許される訳じゃない」

「それはわかっているけど……もう、私には生きる気力が無いの……」

「だったら……だったら残された俺はどうなるんだよ！？俺が強いって君は言うけどさ、本当に強いのは君だよ。今まで様々な絶望を耐え抜いてきたじゃないか！僕はただ絶望を味わっていないだけなんだよ！」

「いいえ、あなたは強いわ……。分かるの。私をここまで勇気付けられたんだから」

「でも君を……君を幸せにできたわけじゃない！」

「私の分も、夏目さんを幸せにしてあげて……」

「俺は君を愛してるんだ！」

「だったら……邪魔しないで！」

「君が死ぬなら俺も死ぬよ」

「やめて……これ以上私を……私を「殺」にしないで！」

「君が死んだら、今度は俺が君に呪われる番になる！」

「それは……」

月海さんはうつむいた。

「君が死ねば、俺はその事実を一生背負っていくことになる……」

「お願い……私の最後の頼み……聞いて」

「聞けないよ…」

「私を見送って…」

「…できない!」

月海さんは首を大きく左右に振った。

「ごめんな…俺は結局、役に立たなかったのか?」

「…あなたと一緒にいると何もかも耐えられる。でも、一人になると…」

「だったら、一緒に暮らそう」

月海さんは一瞬驚いた顔をした。

「もう君から片時も離れないから…いっしょに…」

「…」

月海さんはどこか悲しげな笑顔で俺を見つめている。

「ね?」

「…」

「もう何もしないで、したくないことは何もしないで…ずっと二人で寄り添っていきましょうよ」

「…っ」

確かに彼女の嗚咽が聞こえた。

その目からは一筋の涙がこぼれている。

やっぱり彼女も、それを望んでいたんだ。

「約束するよ、これからずっとそうしよう！」
そう。

絶対に「死」なんかよりもずっと幸せな事があるはず。
僕はそれを見つけた。

「…あなたを信じてよかった」
そう言った瞬間、彼女の足元に黒い何かが滴った。

あれ、血だ。

…彼女は自分の腹部にナイフを刺していた。
彼女は崩れるようにその場に倒れた。

ついに「呪い」は全てを拒んでしまった。

「月海さん！」と叫んだつもりだったのに、声が出なかった。
これから二人で暮らすはずなのに…

それが彼女の望みなのに：

どうして彼女のお腹にナイフが刺さっているんだ？

…負けた？

愛が呪いなんかには？

俺は全身から全ての力を失ったように脱力した。

足はガクガク震えて立っているのが精一杯だった。

目の前が、未来が真っ暗になった。

必死に現実を否定した。

でも、月海さんの腹部は真っ赤に染まっている。

駄目だ、彼女は俺と生きるんだ！

俺は震える手で急いで携帯を使い、救急車をよんだ。

そして、彼女のもとに駆け寄った。

ナイフを抜き、傷口を抑える。

どんどん溢れてくる、赤くて温かい血を改めて見ると…

彼女が日記でよく口にしていた単語を思い出した。

絶望。

「ど、どうして…どうして！さっき約束したのにどうして！どうしてだよ月海さん！」

「…ごめんなさい」

「いいんだよ、救急車呼んだから、まだ生きていられるから…」

「…無駄よ。きつと…死ぬわ…。わかるの…」

「喋らないで！」

「あなたと…過ごした数ヶ月間…夢のように…楽しかった」

「わかったよ、わかったから…これからも…」

「いいえ…。私が犯した…2つの罪は…父と母を殺めた事は、あまりにも大きすぎたわ…。愛を知ったから生きてこれた。でも、愛を知ったから死ななければならぬの…」

ああ、そうだったのか。

愛は呪いに負けたんじゃない。

月海さんは罪悪感に負けたんだ。

父の愛を壊し、更には父自身をも殺し…

それは今まで「復讐」と自分の中で正当化されていたんだろう。

でも彼女が愛の素晴らしさを知るにつれて：

彼女は父の苦悩を理解してしまった。

自分の罪の深さを知ってしまった。

俺が、教えてしまったんだ。

「ごめん…」

月海さんは俺の頬にゆっくり手を当てた。

なんて…冷たい…

「誤る事なんて無いわ…。こっちこそごめんなさい。深山君だけ残して…。でも私はここで、「殺」として死ぬべきだから…。やっと死ぬるんだから…お願い、泣かないで…」

月海さんに言われて初めて気付いた。

俺の目からはいつのまにか涙が溢れていた。

俺の奥が熱かった。そして喉が焼けるような感覚。

「月海さん、死なないで…頼むよ…嫌だよ、君が死んだら僕は…とてもじゃないけど生きていけない！君と知り合って初めて生きる事の意味がわかったんだよ！楽しいという事がわかったんだよ！だから…」

「あなたは大丈夫…。私は父に呪われていたけど、あなたは自由…」

彼女の頬からまた一筋の雫が伝っているのが分かった。

「…勇気を出して…ね？」

僕はそれを優しく拭った。

「…痛いのか？」

「いいえ、嬉しいの。私の死に…涙を流してくれる人がいるなんて…以前なら考えられなかったから…」

「何言ってるんだよ…死んで誰も悲しまない人なんていないよ…」

死なないで…死なないでくれ…！

俺は瞼を閉じて、必死に祈った。

救急車が来るまでの辛抱だ！

月海さん、頑張って。

魂の灯を消さないで！

頼む…

死なないで…

…ふと、瞼を開いて彼女を見た。

美しく儂げな瞳はじっと空を眺めている。

「気持ち良い風…」

「…うん」

「月が眩しい…」

「…」

「星が…滲んでる…」

月海さんはゆっくり俺の頬に当てていた手を下ろした。

「さようなら」

月海さんの目からまた一筋の涙がこぼれた。

彼女は優しく微笑んで…

そして、静かに目を閉じた。

「嘘だ…」

彼女はとても安らかに眠っている。

「…嘘…だ…」

俺は絶望の震え、そして絶望の涙が止まらなかった。

俺は川原で自分の気持ちに気付いてから…

彼女のことだけを考えて生きてきた

眠っている間も

おきて太陽から朝日を受けた時も

学校でも

家でも

夜、月を眺めたときも…

月海さんは俺の全てだった

そして今、俺は全てを失った。

涙がとめどなく溢れている…

月海さんが言った「あなたは強い」という言葉が空しくなるほど…

俺は生きる氣力を失った。

もう俺に生きる意味などありはしない。

「…待っててよ」

俺は彼女のナイフを手を取った。

「ごめん。俺も…そっちに行くよ」

ナイフを自分の腹部にそえて、そして…

俺はゆっくり力をこめて、自分の腹にナイフを沈めた。

俺の服は赤く染まっていった。

激しい痛みが腹部を襲ったが、それも彼女のもとに行けると思うなら心地よかった。

そして、俺はそっと彼女に唇を重ねた。

俺の涙が彼女の頬に落ちた。

「せっかく俺を信じてくれたのに、君を救えなかった。ごめん。本当に、本当にごめん。でも、約束したから…ずっと一緒にいるから…。これからはずっと一緒だから…」

これでいいんだ。

自分の人生は自分で切り開く物と、

自分で扉を選べと、君はそう言った。

俺が選んだ扉は君のもとへ向かう為の扉だった。

これでも自分なりに最大の勇気を振り絞ったんだ。

そう、これでいい。

俺は死ぬ直前だというのに、安堵のため息を一つつき…

ふと、空を見上げた。

月の灯は、優しく二人を包んでいた…

「俺も…夢のような毎日だった…」

そう呟くと、また涙が流れた。

俺は仰向けに倒れた。

もう何も聞こえない。

もう何も見えない。

「静かだな…」

俺はそっと目を閉じた。

…だんだん意識が遠のいていった。

今までみんな、ありがとう。

僕達は幸せに向かって歩き始めたから、悲しまないで。

これで、いいんだ。

俺は自分自身に、そしてみんなに別れを告げた。

「さようなら…」

…気がつけば病院だった…

目の前には涙を臉にいつぱいたためて、目を真っ赤にした華と沙紀ちゃんがいた。そして、華もいる。

月海さんの姿は無い…

…俺は死ななかった。

神様は俺にもう少し生きろと言っているようだ。

「心配…したんだから…バカ…」

華が言葉を途切れ途切れに言った。

顔は泣くのを必死でこらえているという感じだ…

「ごめん」

「あなたが死んだら…アタシがどれだけ悲しむか分かってるの！？お願い、もう二度とこんな事しないで！アタシだけじゃない、みんな悲しむんだから！あなたと彩目ちゃん、たった二人で生きているんじゃないのよ…みんなで頑張ろうよ！」

「…ごめんな」

華は勢い良く俺に抱きついてきた。

…俺は華の頭を優しく撫でた。

「…うう…うわああああん！」

華は今までこらえていたものを全て吐き出すかのように俺の胸元で泣き叫んだ。
ごめん、華。

でも…

「…もう大丈夫」

俺はそう言った。

意識を失っている時、俺は夢をみた。

月海さんの夢だ。

真っ白で何も無い世界。

静かで、どこまでも広がっていた。

地平線も無く、あるのは地面だけ。

そこに俺たちは二人きり…

月海さんは、白い世界の果てを眺めている。

彼女が言った。

「…どうして来たの？」

「約束しただろ？一緒にいるって…」

月海さんはこつちを振り向いた。

「私が死んで…あなたが悲しんだ。それは痛いほど良くわかるわ」
月海さんは俺をまっすぐ見つめている。

「でも、あなたが死んで悲しむのは…夏目さん達なのよ」

「…」

「あなたには本当に申し訳ないことをしたわ」

「…」

「でも、あなたは同じ過ちを繰り返しちゃいけない」

「…」

「でも、本当に嬉しかった。ここまであなたが来てくれた事は…。今度はその優しさをあの子

…華さんに分けてあげて…ね？」

月海さんは空を見上げていった。

「呼んでるわ…お父さんと…お母さんが」

月海さんは父をお父さん、と呼んだ。

「お父さんとお母さんと…3人ならきつと仲良くできる。だから、深山君も…」

「…そうだね」

彼女はやり直すために、天に帰るんだ。

ここは自分の意思で生きるか死ぬか選べる場所のようなものなのかもしれない。

だとしたら、俺だけがいつまでも楽な方ばかり選んじやいけない。

華が、直也が、沙紀ちゃんが俺を待っている。

「…わかったよ。月海さん。ありがとう」

「…ありがとう」

「家族で…今度は仲良くね…」

「…ええ」

彼女はそのまま、どこかへ消えていった…

俺はそれを笑顔で見送った。

「もう大丈夫」

俺はもう一度そう言った。

もう俺は彼女の幻影を追いかけたりしない。

華は俺の胸元で泣き続けている。

直也はそれを温かく見守っている。

直也を想う沙紀ちゃんがいる

俺にはこいつらがいる。

俺はこいつらを幸せにしなければいけない。

俺たちは幸せになる。

月海さんのためにも幸せにならなければいけない。

月海さんは自らの命を絶ち、呪いを断ち切った訳ではない。

ひよっとすると、彼女は逃げていったのかもしれない…

でも、彼女の死を無駄にしてはいけない！

悲しみはどんどん繋がってしまふところだった。

「頑張ろう…」

俺がそう呟いた。

「京君…うん、。頑張ろう。まだまだ死ぬときじゃない」

「そう、俺達はまだまだ羽ばたける…そしてもう一度扉を探そう」

沙紀ちゃんが直也の手を取ったのが見えた。

直也は別に驚いた表情もみせていない。

むしろ、笑顔だ。

沙紀ちゃんが涙をこぼしながら、一生懸命喋った。

「…グス…、私たちには…月海さんが、ついているから…」

「…ああ、頑張ろう。な、華」

「う…グス、うう…。分かった」

そして、思いつき扉を開こう！

大丈夫、俺達はまだまだ羽ばたける！

…その日の晩、俺はベッドから月を眺めていた。

満月はほんの少し欠けていた。

いけないと思いつつも彼女を…

月海さんを思い出し、涙を流していた。

まるで月の灯が…

月海さんが俺を慰めているようだったから…

「泣かないで」と、彼女が言っているような気がした。

「泣くななんて…無理だよ…」

彼女の魂は俺とともに生きています…

でも、悲しかった。

心の中は、空っぽだった…

きっともう一生この空虚な気持ちからは逃れられないだろう。

でも、俺は月海さんの為に泣かないことにした。

彼女を悲しませてはいけない：

でも、今日だけ：今日だけ涙を許して欲しい。

その時、隣に気配を感じた。

「!？」

一瞬月海さんかと思ったが、隣のベッドに寝ていた人だった。
見られたら恥ずかしいので涙をぬぐった。

松葉杖を使ってこっちに：窓際に来た。

月明かりが当たって、その人の顔が見えた。

女性だった。

：長く美しい髪

凛々しく可憐な横顔

鋭く、とても澄んだ眼：

「不思議ね：」

：彼女の声を聞いて、せっかくぬぐった涙がまた溢れてきた。

彼女は俺のベッドの隣に座った。

彼女は俺の顔を覗き込む。

「お父さんもお母さんも…許してくれたわ」

「…月海さん…！」

俺は彼女の背中に両手を回し、強く抱きしめた。

彼女の温もり…そして鼓動を感じる…

…生きている！

「別に…お父さんは怒ってなかった」

彼女は俺の頭を優しくなでてくれた。

「そう…呪いなんかじゃない。私が今まで脅えていただけ…」

月海さんは両親に会うことで…ようやく開放されたんだ。

「お父さんは…私に謝ってたわ。そして、もう少し私に生きろって…」

呪いだけではない。全ての罪から。

いや、罪から開放されたかどうかは分からない。

少なくとも罪悪感からは開放された。

夢なのか、本当にあの世なのか…

そんな事は俺達にはわからない。

でもそれで十分。

…俺達はまだ死ぬには早い。

「お前には愛しあえる人がまだいるからって…。だから…これからはずっと一緒…」

「うん…もう、離さないからな…」

俺は涙声でいった。少しかっこ悪かった。

「泣かないで」

そして、さっき聞こえた幻聴が本物になった。

俺たちはその晩、ずっと抱き締めあった…

月の灯はそんな俺たちを優しく、ずっと見守っていた…

…次の日の朝

俺の眠ったベッドには心地よい朝日が窓から差し込んでいる。

小鳥のさえずり、騒がしくゆらめく町並み…

俺は改めて生を感じた。

月海さんが言うには、俺は4日もの間、昏睡状態に陥っていたらしい。

月海さんという俺が目覚める1日前に目覚めた。

…見事に二人とも重症だ。

俺は生の奇跡を改めて感じた。

「そういえば…」

俺は月海さんの方を向いた。

「俺、夢の中で月海さんに華を幸せにしてやれって言われたんだけど」
隣のベッドでりんごを剥いている月海さんが俺の方を見て答えた。

「ほら、最長記録」

確かに、りんごの皮は途切れることなく長く長く続いている。

でも、そうじゃなくて…

「…月海さんが生きていたら、俺は結局誰を幸せにすればいいの？」

月海さんはりんごを切って俺に差し出してきた。

「りんご食べる？」

「真面目に聞いてよ…」

「真面目な話じゃないもの」

「真面目だって月海さん…」

月海さんはりんごを一口頬張って答えた。

「それはもちろん、あなたの愛している人でしょ。それと、これからは「彩目」って呼んで」
それを聞いて俺は一瞬驚いたが、すぐ理解した。

そう、彼女の中にあつた「殺」の呪いは解けたのだ…

「…彩目ちゃん、俺が誰の事が好きか知ってるでしょ？」

彩目ちゃんは無表情だったが、少し顔を赤らめているのに俺は気付いた。

「ええ。よくくしってるわ」

「じゃあ、彩目ちゃん、俺に幸せにして欲しいんだ？」

「仲がいいのね。お二人さん」

「げっ、と思うとやはりその声は…」

「おはよう、夏目さん」

彩目ちゃんは別に驚く様子も無く挨拶をした。

華がドアの前に立っていた。後ろには直也と沙紀ちゃんが。

「朝っぱらから幸せにするだのしないだの、よく言うわ」

聞かれていたと思うと少し恥ずかしかった…

「あの、京さん」

「ああ、沙紀ちゃん。心配かけたね」

「いえ。あのー、実は京さんにお伝えする事が…」

「あの、実は…」

「…ええ！ホントに!？」

俺は沙紀ちゃんの言葉を聞いて心底驚いた。

「直也と付き合ってる!?」

俺と彩目ちゃんは顔を見合わせた。

「私、結局告白したんです。そしたら直也君がオツケーしてくれて…」
直也は照れながらこっちを見ている。

「直也…」

直也は首を左右に振った。

「…京君、僕が決めた事だから」

「…そうか」

俺は直也にあえて何も問わなかった。

直也には直也なりに何か、思うところがあつたんだろう。

「良かったな、沙紀ちゃん」

「あ…はい」

「幸せにしてやれよ、直也」

「ははは…」

「言っとくけど」

華が話しに割り込んできた。

「アタシは諦めてないからね、彩目ちゃん！覚悟してなさいよ」

華は彩目ちゃんに指を指した。

荒れる華とは対照に、彩目ちゃんは静かにりんごを頬張っている。

「…望むところ」

嬉しいような、これから大変のような：

「へへへ：行こつ、直也君に沙紀ちゃん。学校遅れちゃう！」

「え？華：学校つて、今夏休みじゃ：」

「アタシね、バレー部にもつかい行くことにしたの！昨日、京介に頑張ろうって言われて：自分が逃げてる事に気付いたんだ。ブランクもあるだろうけど、アタシがみんなと一緒に頑張れるのはコレしかないから！」

「そうか：。うん、そのほうが良い」

俺は久々に元気な、希望に向かって走る華を見ることができて嬉しかった。

「僕らは軽音部に新しいメンバーが入ったから、今日音あわせするよ」

なんか俺が少し眠っている間に、結構いろいろあったみたいだ：

俺は絶え間ない時の流れを感じた：

そして、俺達はそれに流されてはいけない。

少しつまずいただけだ。

そう、これからも一度羽ばたくんだ！

「じゃあな。これからも：頑張ろうぜ」

「うん！じゃあね！」

「それじゃあ、京君に彩目さん」

「おだいじに」

三人は病室を出て行った。

静かにりんごを頬張る彩目ちゃん。

「…もてる男は辛いわね」

「ははは…」

「私もうかうかしてられないかも」

「浮気はしません」

「どうだか？」

俺は、昨日までの彩目ちゃんとのギャップに少し戸惑った。

入学当初、俺は彩目ちゃんを冷たい女の子だと思っていた。

でも、本当はとても優しい子だった。

彩目ちゃんのお父さんは妻を愛するあまりに狂気に走った。

とても、深く人を愛する事のできる人だったんだろう。

その分彩目ちゃんを憎んでしまった。

本当は、彩目ちゃんも彩目ちゃんのお父さんとても優しくくて…

とても繊細な心の持ち主だったんだ。

「いい眺めね」

彩目ちゃんは外を眺めている。

俺は町を窓から見下ろした。

町は朝を迎えている。

そして僕らも何とか朝を迎える事ができた。

色々あったけど、今俺の隣には彩目ちゃんがいる。

俺はそれで満足だ。

これからもいろんな事があるんだろう。

でも俺は彼女が信じ続けてくれる限り、彼女を守り続ける。

「いっしょに、扉を探そう」

「…ええ。扉を…希望を探しましょう」

「希望は何処にあるのかな？」

月海さんは俺の方を向いた。

「沢山、見えてるけど…掴めないだけ」

「どうやって掴むの？」

「例えば…」

彼女はいきなり俺の顔を掴んで、口付けを交わしてきた。

「！」

俺は心底驚いた。

彼女は照れながら、優しい笑顔でこう言った。

「…こうやって一つずつ確認していきましよう、幸せを。大切なのは、それが希望でもある事、希望への道でもある事なのよ」

「…そうだね。俺達は強くないけど…幸せがあるから希望に向かって頑張れるんだ。そして希望を掴んでいけば、幸せがやってくる。俺と彩目ちゃんが出会うように…」

「ええ…必死でなくても良い。だから、今日も明日へ向かいますよ…」

雲は明日に向かって流れていき、

太陽は俺たちを優しく照らす。

青い空はそれを静かに包み込む。

そして、月もまた何処かで彼らを静かに見守っているんだろう…

いつまでも…

「これからずっと先…あの時生きてて良かったねって思えるかしら？」

「思えるさ。今、そう思っているみたい」

完